

の平面形を呈するものと思われるが、南西に掘られた現代の井戸によって大半を削平されている。美濃焼と思われる天目茶碗が1個、埋土の中層より出土している。木棺等の痕跡は、認められなかった。

S E01 調査区中央部において検出された  $1.0 \times 0.8$ m、深さ 60cm の隅丸方形を呈する井戸である。

S K01 調査区中央部に位置する直径 1.2m、深さ 20cm の円形の土坑である。中世の須恵器、土師器が出土している。

S K03 調査区の南西隅において検出された落ち込み状の遺構である。中世の遺物が比較的多く出土した。粘土、砂の堆積がみられる。

S K04  $1.5 \times 1.3$ m、深さ 35cm の隅丸方形の土坑である。壁は直にたちあがり底部は平らである。

S K07 に上方を切られている。

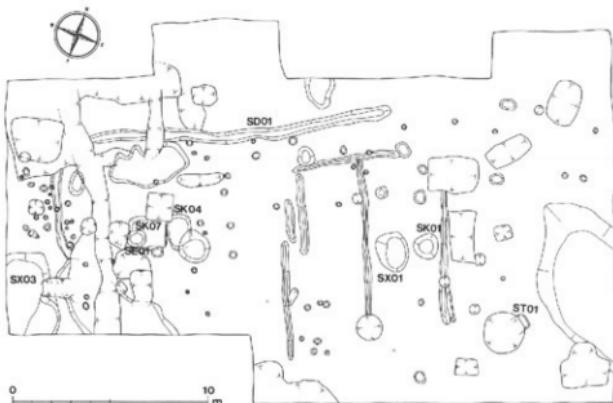


fig. 93  
第1遺構面平面図

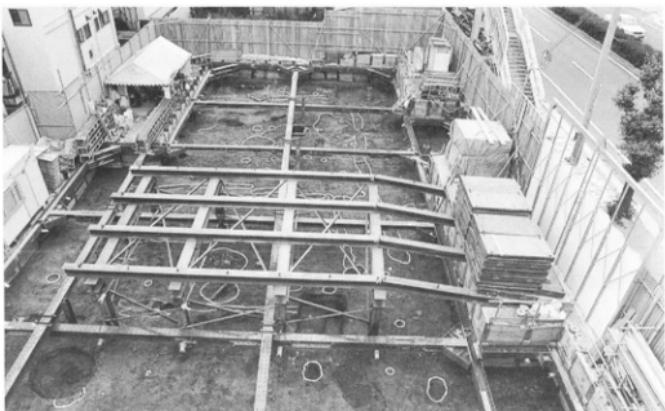


fig. 94  
第1遺構面全景

S D01 調査区を東西に流れる幅50cm、深さ35cmほどの溝である。西側ほど削平を受けて残りが悪い。

S X01 拳大の礫および遺物によって埋まつた2.0m×1.6mの楕円形の土坑である。深さは15cmほどである。中世の須恵器、土師器が出土している。

第2遺構面 調査区の東部約3分の1ほどをおおう洪砂上において確認された遺構面で奈良～平安時代前期のピットが集中する。

建物11 調査区の南東隅において検出された、2×3間以上の掘立柱建物である。南へさらに延びるようである。柱間は、南北2m、東西1.7mであり柱掘形は、30×50cmほどのやや崩れた隅丸方形である。

第3遺構面 弥生時代後期の堅穴住居址1棟、古墳時代の掘立柱建物1棟などを検出した。

S B01 調査区北西隅において検出された、南北5.3×東西5.6mの隅丸方形の堅穴住居址である。東辺部分を現代の井戸によって大きく削平されている。北西隅に140×170cm、深さ30cmほどの四角い土坑が掘り込まれているほか中央部分にも80×40cmの楕円形の土坑がある。

北東部分の床面に多量の土器が出土した。

建物21 調査区の中央～南部に位置する、3×3間以上の掘立柱建物である。柱間は、南北1.6m、東西1.6mで、柱掘形は直径30～40cmほどの円形である。

建物22 調査区の南西部において柱穴3基2分を検出した。柱間は2.0mである。南側の未掘部分に広がるようである。

出土遺物 遺物は、包含層および遺構埋土より、陶磁器、土師器、須恵器、弥生土器など、総量で



fig. 95 第2遺構面平面図



fig. 96 土器満まり



fig. 97 S B01

28ℓ入コンテナに約15箱の遺物が出土した。

その大部分を占めるのは、SB01および土器溜まりから出土した一括遺物である。これらの土器は、概ね弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期のものと考えられる。

3. ま と め 今回の調査においては、3面にわたる遺構面に、掘立柱建物、竪穴式住居、土坑、溝などの遺構が確認された。

また、北に存在する古墳群の広がりは認められなかったものの、かわりに弥生時代末から古墳時代初頭にかけての住居址や土器溜まりが検出され、多量の遺物が出土した。この地域における土器組成を知るうえで良好な資料になるものと思われる。

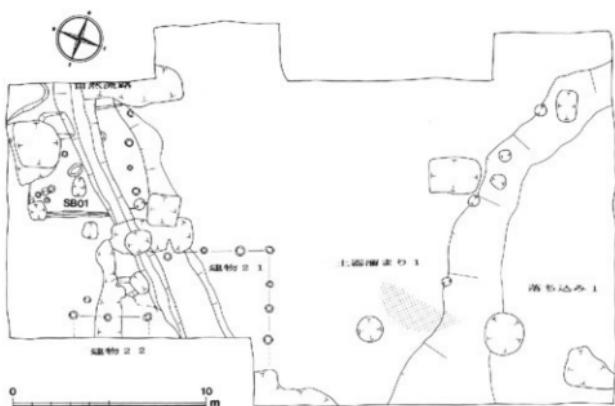


fig. 98  
第3遺構面平面図

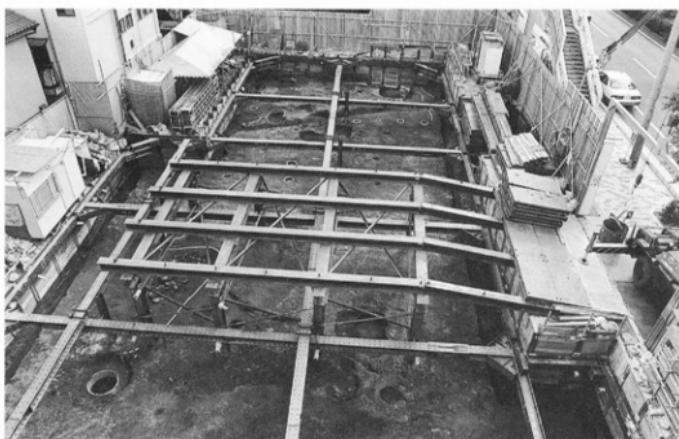


fig. 99  
第3遺構面全景

## すみよしみやまち 11. 住吉宮町遺跡 第26次調査

1. はじめに 住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川に形成された標高約19m～28mの扇状地に位置する遺跡であり、旧住吉村に存在している。

これまでの調査では、古墳時代中期～後期には前方後円墳と考えられる坊ヶ塚古墳の周囲から南側に広がる古墳群が存在することが判明している。



fig. 100  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 基本層序

基本層序 代遺物包含層、灰褐色砂質土（古墳時代遺物包含層）、淡黑茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土～黃褐色砂質土である。

第1遺構面 中世の遺構面であり、土坑、ピットが確認された。

SK101 径約118cm×約88cm、深さ約10cmを測る不整円形の土坑である。土坑から多くの礫が出土した以外に遺物は確認していない。

第2遺構面 基本的に奈良時代の遺構面である。ただし、遺構面は東西方向へ緩やかに傾斜しており、最も標高の高い西端では、古墳時代後期の遺構面（第3遺構面）を同一遺構面で検出した。奈良時代の掘立柱建物や柵列等の他、古墳時代後期の竪穴住居等を確認している。

SB201 奈良時代で、1間×2間以上の



fig. 101 第1遺構面平面図

掘立柱建物である。柱穴の掘形は楕円形で、径約80cm×120cm、深さ約30cm～50cmを測る。柱間は東西約3.8m、南北約1.4mである。

S B202 調査区の東端で検出した、古墳時代後期の竪穴住居である。東西幅は約3.4mを測る。竪穴住居の上層から、須恵器の壺蓋等が出土している。

柵列201 調査区の中央付近から、柱穴と杭痕が南北方向に並ぶ、奈良時代の柵列を検出した。柱穴は径約50cm、深さ約20cm～35cmを測り、柱間は約1.8m～2.2mである。

柵列201 調査区の南側から、ほぼ南北方向に並ぶ奈良時代の柵列を検出した。柱穴は径約20cm、深さ約6cm～10cmを測り、柱間は約1.2m～1.6mである。

第3遺構面 古墳時代後期の遺構面である。主に柱穴を検出したが、建物等としての確認はできなかった。

S R301 調査地の西端から検出した。幅約2.3m、深さ約0.4mの流路である。中砂～粗砂が主に堆積している。

下層 第3遺構面を形成する暗灰褐色砂質土から、少量の土器片が出土している。その為トレンチを設定し下層の調査を行ったが、遺構は確認できなかった。

### 3.まとめ 今回の調査では中世後期、奈良時代、古墳時代後期の遺構が確認できた。

古墳時代後期 竪穴住居と多数の柱穴を確認している。ただし柱穴から建物等としてのまとまりは確認できなかった。調査地の東側に隣接した地域でも、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が確認されている。

奈良時代 掘立柱建物、柵列の他、多数の柱穴を確認している。遺構の密度は最も高い。

中世 柱穴、土坑等を確認した。遺構の密度は希薄である。これまでの調査結果から、周囲には中世集落も存在し、広い範囲に遺構の散在する状況が確認されている。

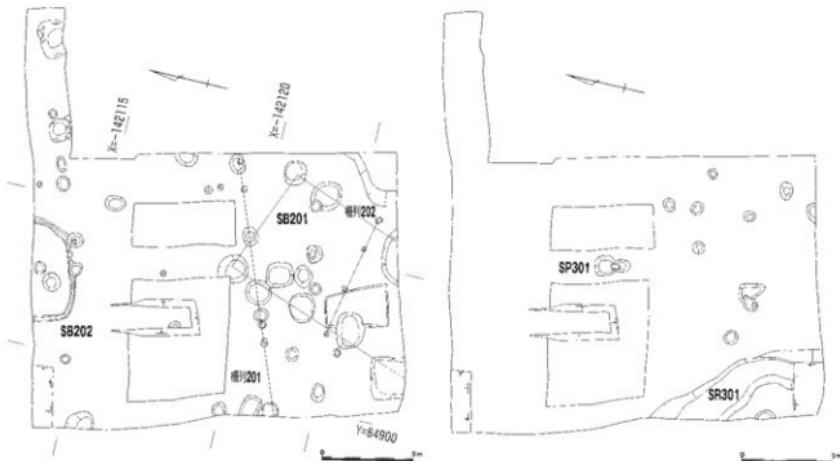


fig. 102 第2・3遺構面平面図

## すみよしみやまち 12. 住吉宮町遺跡 第27次調査

### 1. はじめに

住吉宮町遺跡は住吉川と石屋川が形成した複合扇状地上に立地する遺跡で、標高は約20mである。六甲山の南麓は早くから市街化が進み、埋蔵文化財の存在は現在でもよく分かっていないケースがある。住吉宮町遺跡も存在が明らかになったのは昭和60年のことであり、周知の遺跡となってからまだ年月が浅い。しかし市街地再開発に伴う発掘調査や阪神・淡路大震災の復興に伴う発掘調査が進み、今回で27回目の調査となった。



fig. 103  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査範囲は東西33m、南北23mのほぼ「L」字状であるが、遺構面までが深いために法面幅を大きく設定し、現地表面での掘削範囲は東西約40m、南北約30mである。調査区は東西方向の部分を南区、南北方向の部分を東区、東区の西隣にある突出部を北区とそれぞれ呼称した。

#### 層序

扇状地特有の、細部によって土層の堆積が異なる状況であるが、概ね以下のようにまとめることができる。近現代の造成土・擾乱、江戸時代以降の旧耕作土の下には60~70cmの厚さで乳褐色系の洪水堆積層がある。この層は土質によって数層に細分できる。その下には黒褐色~茶褐色砂質土、黒色系の砂質土があり、同様黒色系の砂質土も土質によって数層に細分できる。さらにその下には再び黄褐色系の洪水堆積層がつづくが、特に北区を中心に複雑な堆積状況を呈しており、複数回の洪水の存在が推定できる。乳褐色系の洪水堆積層上が江戸時代、黒褐色~茶褐色砂質土上が奈良時代、黒色系の砂質土上が古墳時代、黄褐色系の洪水堆積層上が弥生時代の遺構面と考えられる。

第1遺構面 江戸時代の遺構面であるが、溝を1条、ピットを1基検出したのみである。

S D101 北区で検出した東西方向の溝である。長さ4.8m以上、幅60~80cm、深さ約10cmで、両側共に未調査部分へ延びている。断面の形状は浅い皿状で、埋土は淡灰色砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片・瓦片が出土した。水田段差の下に位置する溝で、この溝を境界として北側の水田が1段高い。

S P101 S D101の東側底面で検出した円形のピットである。直径約40cm、深さ約10cmで、埋土は灰色砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。

第2遺構面 奈良時代の遺構面で、溝を1条検出した。

S D201 北区で検出した北西から南東方向の溝である。長さ5.9m以上で、両側共に未調査部分へ延びている。幅40~60cm、深さ20~30cmで、断面の形状は逆台形である。埋土は上部が黄灰褐色シルト、下部が茶灰褐色粗砂である。調査区周囲の地形の傾斜とは逆に底面は北西へ傾斜している。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。

第3遺構面 古墳時代の遺構面で、土坑墓を1基、ピットを1基検出した。

S T301 南区の西端で検出した土坑墓である。墓坑は東西75cm、南北180cmの長方形であるが、後世に削平され深度は5cmしか残っていないかった。埋土は茶灰褐色粗砂で、墓坑の形状から木棺の存在が推定できるが、棺材は完全に腐朽してしまったのか確認できなかった。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。住吉宮町遺跡でこれまで確認されている古墳



fig. 104 調査区全景

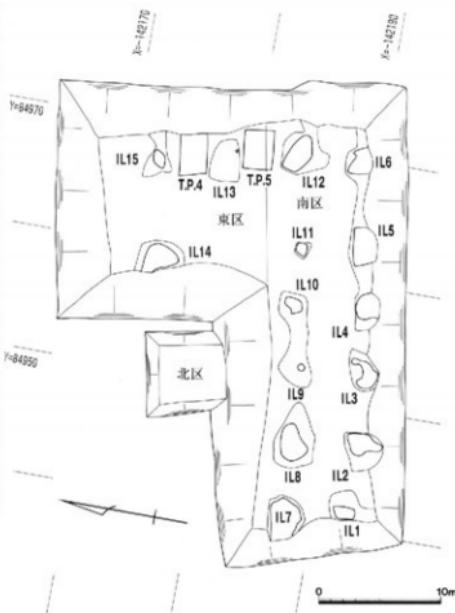


fig. 105 調査区平面図

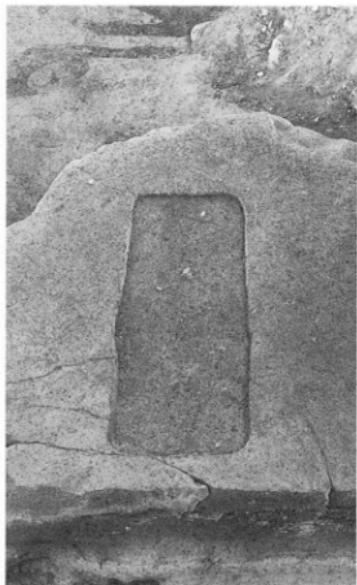


fig. 106 S T01

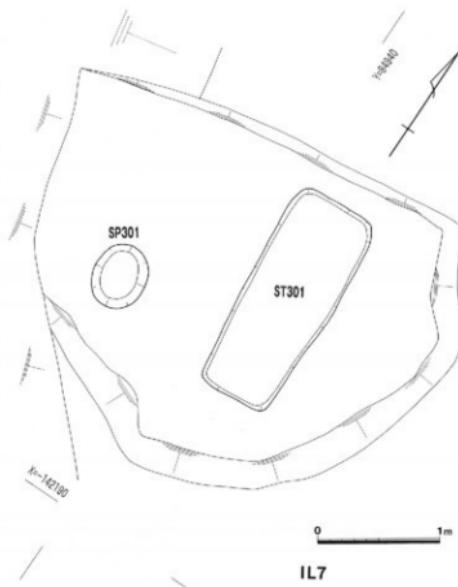


fig. 107 第3遺構面平面図

のように、この土坑墓にも周囲に溝や貼石が存在した可能性があるが、後世の削平および現代の攪乱で破壊されてしまったのか確認できなかった。したがって今回は土坑墓として取り扱った。

**S P301** 南区の西端で検出した楕円形のピットである。長径約50cm、短径約40cm、深さ15cmで、埋土は暗灰褐色粘性砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。

**第4遺構面** 弥生時代の遺構面で、竪穴住居を1棟、ピットを3基検出した。

**S B401** 南区の南辺西寄で検出した方形の竪穴住居であるが、住居の大半は法面下の工事影響範囲外であり、国土座標の方位から約45°振れている住居の隅の一つを検出したに過ぎない。北東辺は2.4m、北西辺は1.1mまでを確認した。深さは約10cmである。住居の角から北西辺にかけての位置には幅約10cm、深さ3cmの周壁溝が巡っている。床面の上で直径10~30cm、深さ約10cmの浅いピットを7基検出したが、主柱穴は法面下の位置にあるのか確認できなかった。埋土は住居本体が淡灰褐色砂質土、周壁溝が暗オリーブ灰色シルトである。遺物は埋土の上面から弥生時代後期の土器が出土したが、状況から判断して住居が埋まっていく過程で捨てられた物と考えられる。

**S P401** 南区の南西隅で検出した円形のピットである。直径約30cm、深さ15cmで、埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

**S P402** S P301の南側で検出した円形のピットである。直径約50cm、深さ20cmで、埋土は暗灰褐色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

SP403 S P302に一部破壊される状態で検出した円形のピットである。直径約50cm、深さ約20cmで、埋土は暗灰色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

3. まとめ 住吉宮町遺跡は近年急に調査事例が増加してきた遺跡で、埋没古墳群の発見など、通常の集落遺跡にはない特殊性を有している。ただ今回の発掘調査では遺構面の遺存状況が極めて悪く、検出した土坑墓も古墳であったかどうか判断がつかない。しかし第4次調査でも小規模な箱式石棺を確認しているなど、大きな墳丘を持たない埋葬施設が存在していることも事実である。從来今回の調査地点周辺が古墳群の西端付近になるであろうとの想定がなされていた。調査によって古墳群の範囲を確定することはできなかったが、埋葬地としてはまだ西方へ広がっていたことが考えられる。

弥生時代に関しても遺構面の遺存状況が悪いことは同様であるが、堅穴住居を確認したことにより、当時の集落の広がりを確認することができた。しかし敷地東隣の市道をはさんで向かいの第1次調査では鎌倉時代の遺構が確認されているが、今回の調査では遺構面の広がりは確認できなかった。鎌倉時代頃に相当する部分には厚く洪水堆積層が存在しており、遺構面はこの洪水層によって削られてしまった可能性が高い。



fig. 108 SB401

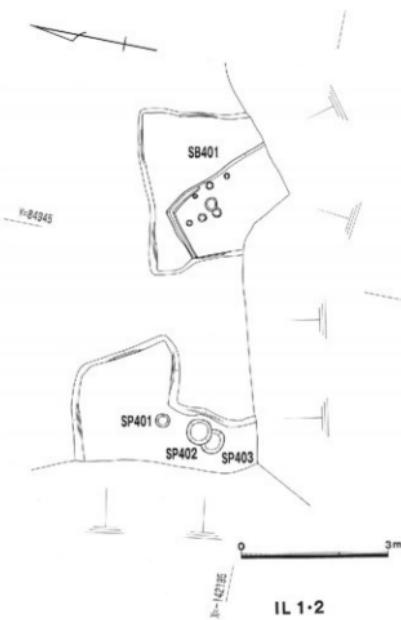


fig. 109 第4 遺構面平面図

## すみよしみやまち 13. 住吉宮町遺跡 第28次調査

### 1. はじめに

住吉宮町遺跡は、これまでに27次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代～中世にいたる複合遺跡として周知されている。

近年調査数が増加しているが、昨年度に実施した第23次調査では、地震によって井戸枠の上半部が大きく倒れた状態で検出された奈良時代の井戸などを検出した。

今回の調査は、基礎部分において発掘届出書による工事影響深度（現地表下1.2m）までについて実施した。



が出土した。

S X01 幅70cm、長さ1.2m以上を測る。土師器の小片が出土した。

ピット 径15~30cmのピットを検出したが、S P01のみ須恵器片が1点出土した。S P01は径25cm、深さ5cmを測る。

2トレンチ 現地表下に約50~80cmの盛土が存在し、その下層に旧耕土、灰茶色系の細砂層が堆積している。遺構面は確認されず、また遺物も少量出土したのみである。

3. まとめ 今回は、工事影響深度までの限定された調査であったため、中世のものと思われる遺構をいくつか検出したにとどまった。よって当該期の本調査地の状況を明らかにするには至らなかっものの、周辺の調査結果から判断すれば、下層および未調査部分においても埋蔵文化財が存在することは確実である。

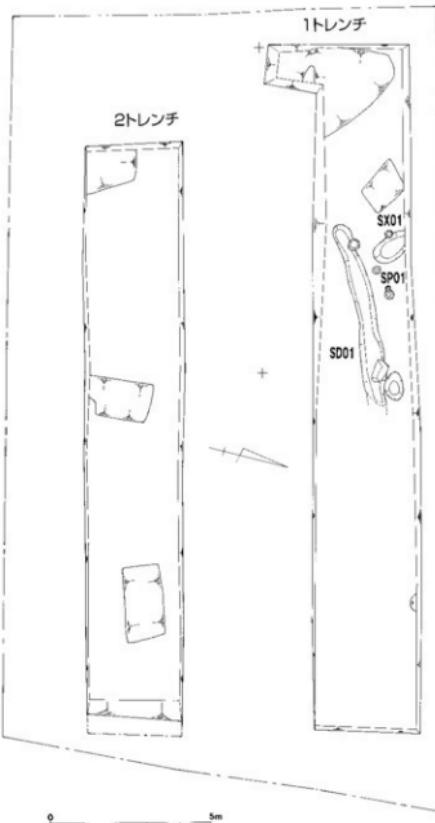


fig. 111 調査区平面図

## ほんじょうちょう 14. 本庄町遺跡 第6次調査

## 1. はじめに

本庄町遺跡は、六甲山麓から流れ出る芦屋川と高橋川に挟まれた平野の三角州帯及び自然堤防帶に立地する。当遺跡の一部は既に兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代後期のドングリ貯蔵穴、弥生時代の水田などが確認されている。



fig. 112  
調査地位置図  
1 : 2,500

遺跡名	調査年次	調査機関	遺構・遺物	文献
1 本庄町	1984年	⑩古代学協会	弥生時代前期末の水田。縄文時代後期の土器。	片岡はか1983年
2 本庄町	1986年	兵庫県教育委員会	縄文時代後期初頭のドングリ貯蔵穴5基。弥生時代後期の水田。縄文時代前~後期の土器。	別府はか1991年
3 本庄町	1992年	神戸市教育委員会	縄文時代後期の土器。古墳時代の田下駄。奈良・平安時代の水田。	森木1995年
4 深江北町（A地区）	1984年	兵庫県教育委員会	弥生時代後期~平安時代後期の柱穴。土鍬、瓶、銷齒等の遺具。	山下はか1988年
5 深江北町（C地区）	1984年	兵庫県教育委員会	弥生時代中期~平安時代初期の土器。輪刻不明の杭削と土坑。	山下はか1988年
6 深江北町（C地区）	1985年 1986年	兵庫県教育委員会	弥生時代中~後期の房、土坑。古墳時代初期の徑7~8mの円形周溝墓11基と土器堆积。古墳時代後期の竪穴住居3棟。奈良時代~平安時代初頭の掘立柱建物3棟。銅製鉗環。小鋼鏡。	山下はか1988年
7 深江北町（D地区）	1984年	兵庫県教育委員会	奈良時代後期の水田。	山下はか1988年
8 深江北町（E地区）	1989年	兵庫県教育委員会	弥生時代後期後半の掘立柱建物2棟、土坑多款。中世の掘立柱建物、土坑、水田。埴輪片1点。	村上はか1991年

本庄町遺跡発掘調査一覧表

今回の調査は震災復興事業マンション新築に伴って行った。調査地に最も近い本庄町遺跡（1986年度）は北へ150mの位置にあって、砂堆背後湿地であり、南東へ150mの位置には深江北町遺跡（E地区）があり、これもまた南側へ広がる砂堆の後背湿地である。これら2地点の中心に位置する今回の調査地もまた砂堆の後背湿地と考えられた。

- 基本層序 現地表から下に大きくⅧ層に分けられる。
- I層：現代盛土。
- II層：近現代耕作土。2層に細分可能。IIa層；耕作土。IIb層；床土。
- III層：近世堆積土。層下半には薄い洪水砂が認められる。土器、陶磁器を若干含む。
- IV層：近世耕作土。2層に細分可能。IVa層；耕作土。IVb層；床土。
- V層：古墳時代末～中世堆積土。層下半には薄い洪水砂が認められる。古墳時代末～中世の土師器、須恵器、瓦器などの破片を多く含む。上面が第1遺構面。
- VI層：古墳時代末耕作土。土師器、須恵器などの破片を少量含む。上面が第2遺構面。
- VII層：縄文時代後期～古墳時代堆積土。3層に細分可能。VIIa層；古墳時代堆積土。古墳時代の須恵器、土師器を少量含む。VIIb層；洪水砂層。VIIc層；縄文時代後期～弥生時代末堆積層。縄文土器、弥生土器を少量含む。VIIa層上面が第3遺構面。VIIc層上面が第4遺構面。
- Ⅷ層：無遺物砂層。上面が第5遺構面。

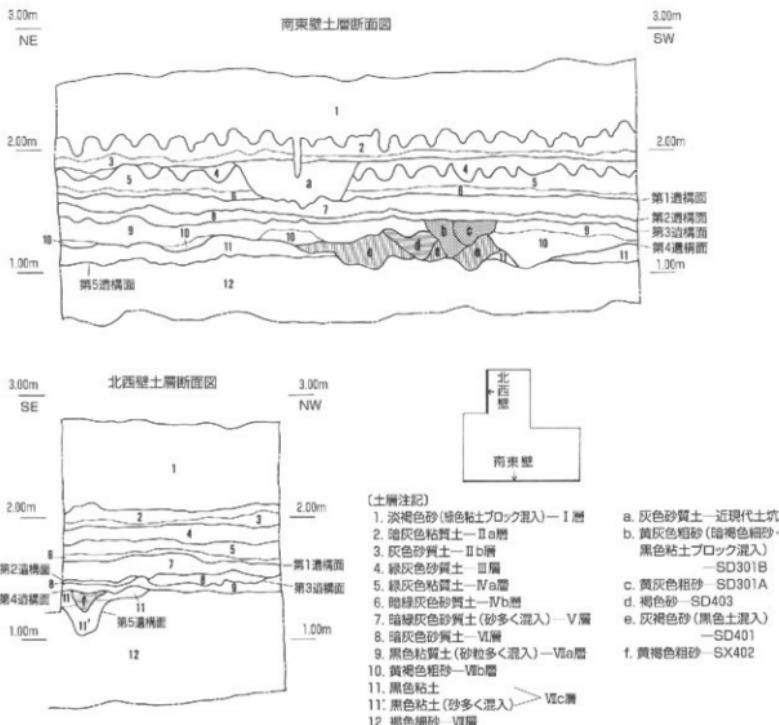


fig. 113 調査区東壁・北西壁土層断面図



fig. 114 第1・2遺構面平面図・断面図(平面図1:200、断面図1:80)

近世～現代 II層上面で、近現代の歎跡、IV層上面で近世の歎跡が存在する。いずれも調査区壁面の耕作地遺構 土層断面によって確認した。調査区南東壁で凹凸のある歎の横断面、南西壁で水平な土層断面が見られ、北に向かって西に振った方向の歎であって、現在の街割りの方向に沿ったものであったことがわかる。いずれの歎遺構も洪水によって廃絶する。

第1遺構面 本来はV層上面に形成された遺構であるが、V層上面では検出が難しかった為に、後述するVI層上面において第2遺構面の遺構と同一面で検出した。V層には、古墳時代末～中世の遺物を含むが、近世陶磁器を含まないため、中世以後、近世にIV層の耕作土層が形成されるまでの間の時期の所産である。

SK101 調査区北半で検出した。一辺1.2mの隅丸方形。深さ50cm。埋土はV層の土と似ており、灰色粘質土に多く砂が混入したものの単層である。湧水点まで掘り抜かれているため井戸と考えられる。井戸枠等の施設は遺存していなかった。遺物は土師皿の小破片が1点出土した。

SK102 調査区東半で検出した。1.2×0.9mの隅丸長方形で、深さ60cm。埋土の状況はSK101

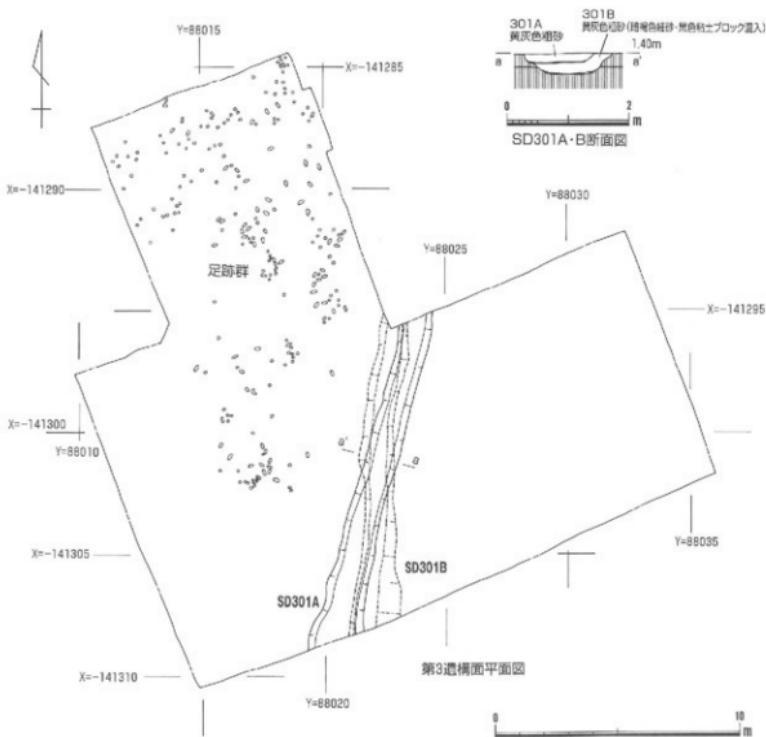


fig. 115 第3遺構面平面図・断面図(平面図1:200、断面図1:80)

と同様であって、湧水点まで掘り抜かれており、井戸と考えられる。遺物は出土しなかった。

**第2遺構面** VI層上面で検出した。古墳時代末～中世の間のある時期の水田遺構である。調査区全体に、ヒト、獣の足跡の他に棒で突いた様な小円孔、幅20cmの浅い溝数条、小ピット2個があり、それらはV層下部に見られる洪沢砂が貯入した状態で検出できた。足跡は調査区北半部に多く見られた。溝の方向は北に向かって西に振っており、水田の方向は現在の街割りに沿ったものである。畦畔は検出できなかった。

**第3遺構面** VIIa層上面で検出した。古墳時代後半～末の間のある時期の水田遺構である。溝1条(SD301)とヒト、獣の足跡などが検出できた。それらはVI層下部に見られる洪沢砂によって埋没していた。

**SD301** 調査区の中央を南北に走る溝である。一度流れを付け替えており、先行する溝を301B、それが埋没してから方向を若干振って掘られた溝を301Aとする。いずれの溝も南北の高低差はほとんどないが、わずかに南が低い。

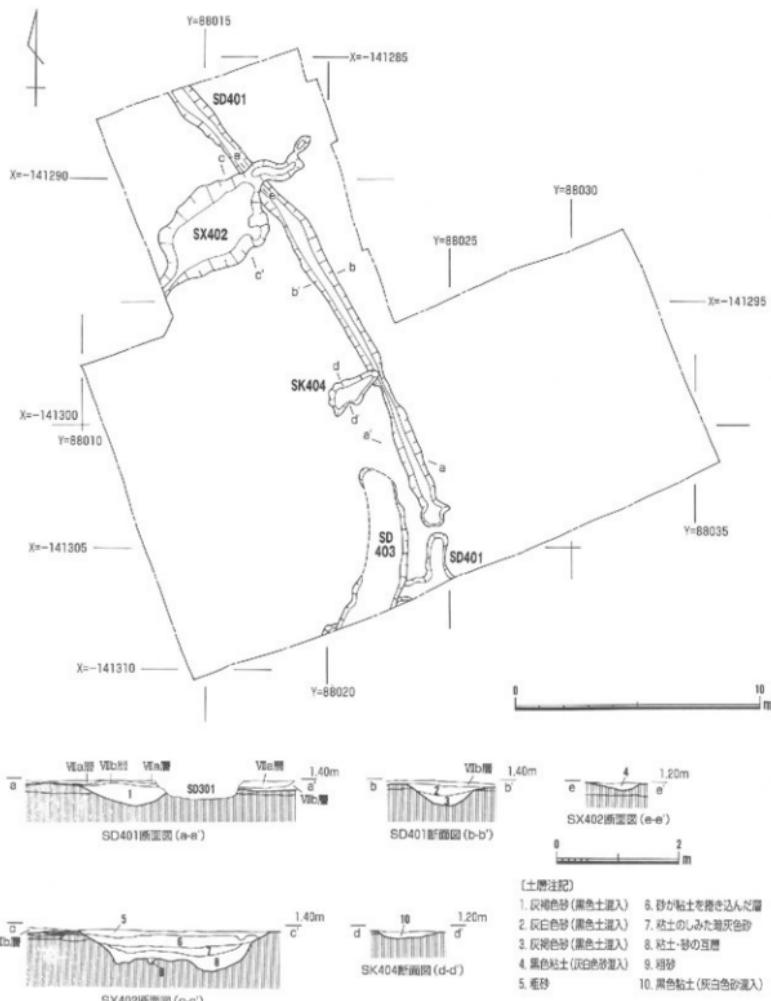


fig. 116 第4遺構平面図・断面図(平面図1:200、断面図1:80)

301Aは幅1.5m、深さ15cmで、底が平たい。埋土は、底に若干薄く黒色粘質土の堆積があるが、ほとんどが粗い灰白色砂で洪水によって埋没したと考えられる。遺物は土師器小型壺のほか土師器の破片が少量出土した。

301Bは幅1.5m、深さ35cmで、底は301Aに比べて若干丸い。埋土は、底に薄く黒色粘

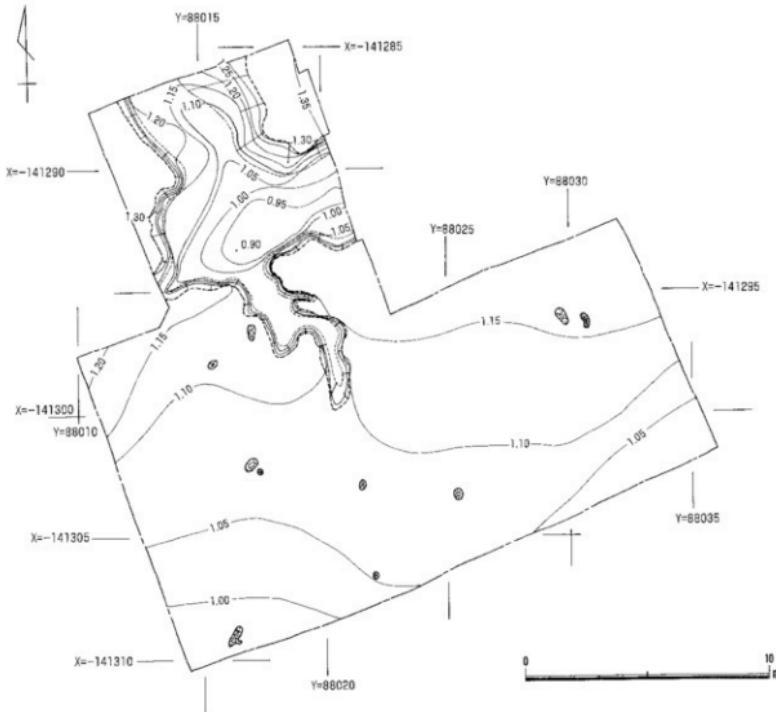


fig. 117 第5遺構面平面図 (1 : 200)

質土の堆積があり、それ以上は黄灰色粗砂、暗褐色細砂が互層に堆積しながら、ときおり黒色粘土ブロックが混入するものである。遺物は土師器壺や軽石のほか土師器の破片が少量した。また、弥生土器の壺の底部も混入していた。

S D301の東側では全く足跡が検出されないことから、この溝は水田の東側を区画する溝の可能性がある。

**第4遺構面** 本来はVIIc層上面に形成された遺構であるが、VIII層上面で検出した。弥生時代末の溝2条 (S D401、403)、溜め池状土坑 (S X402)、土坑 (S K404) が検出できた。それらは、洪水砂層であるVIIb層によって埋没していた。遺構の切り合い関係から、S D401はほかの遺構よりも先行するものである。

**S D401** 調査区の中央を北に向かって西に振った方向に走るほぼ直線的な溝である。調査区南端付近で一旦途切れ、30cmの間をおいて再び始まるやいなやすぐ南西方向に屈曲する。幅1m、深さ35cmで底が丸い。埋土は褐灰色砂に黒色土が混入するものである。溝の南北の高低差はほとんどないが、わずかに南が低い。遺物は弥生土器の破片が少量出土した。

S X402 調査区北半で検出した径3~4m、深さ65cmの不整形土坑に幅70cmの溝が北東と南西に取りつく遺構である。S D401を切って形成される。底は湧水点に達し、常に水が湧き出る状況である。埋土は粘土と砂の互層となっており、水が流れている時と枯れた時があったようである。溝が洞脇に取りついていることから、溜め池として使われたと考えられる。また、土坑がかなり埋まって機能を果たさなくなった後、窪んだ部分に弥生時代末の壺、高杯が遺棄された状態で出土した。その他、弥生土器の小破片が少量出土した。

S D403 調査区南半で検出した幅2m、深さ10cmの浅い南北方向の溝である。S D401を切って形成される。遺物は弥生土器の壺の破片が1点のみ出土した。

S K404 調査区中央で検出した径1~2m、深さ10cmの浅い不整形土坑である。S D401を切って形成される。遺物は出土しなかった。

第4遺構面では耕作地は確認できなかったが、溝、溜め池状土坑の検出から、耕作の水利に関係する遺構群と考えられる。

**第5遺構面** VII層上面で検出した。調査区南半で径30~70cmのピットをいくつか検出したほか、北半で不整形な広い範囲で深さ40cmほどの窪みを検出した。この窪みにもVIIc層が堆積しており、その中より縄文後期の深鉢が出土した。よって、VIIc層は縄文後期より堆積が始まったと考えられ、VII層には遺物が含まれないことから、縄文時代後期以前と以後では周囲の環境に大きな変化があったと考えられる。

**出土遺物** 出土した遺物のうち、実測可能な遺物については実測し、観察結果は表にまとめた。

**3. ま と め** 縄文時代後期以降、現代に至るまで、土層断面において7面の遺構面を確認し、そのうち中世以前の5面について平面的な調査を行った。その結果、縄文時代後期において初めて文化面が認められ、その後洪水や堆積、盛土を繰り返しながら、弥生時代末に耕作関係の水利施設、古墳時代後半～末に水田と区画溝、古墳時代末～中世に水田、中世以降に井戸をもつ生活面、近世に耕作地、近現代に耕作地という順に文化面が形成されたことが明らかとなった。つまり、本庄町遺跡の今回の調査地は有史以来耕作地として機能してきた土地であって、現代になって初めて宅地となったのである。

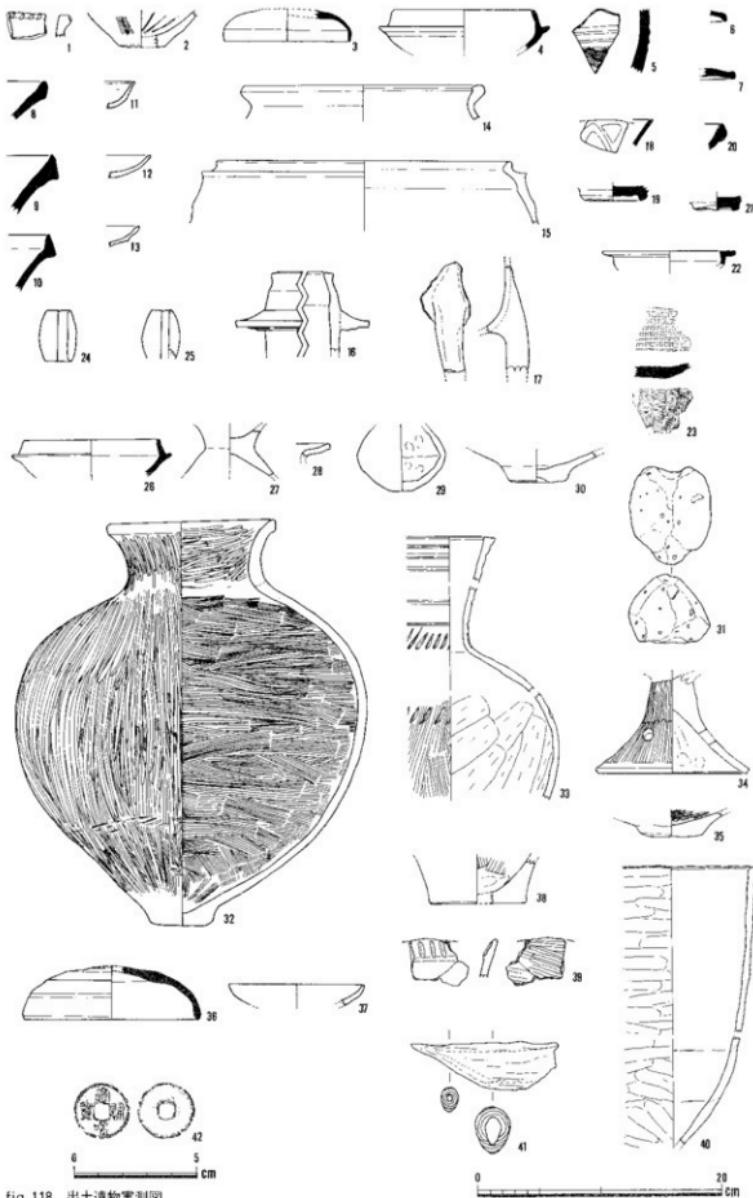


fig. 118 出土遺物實測圖

種類	器種	色調	胎土	形態の特徴	技法の特徴	法量(cm)	出土構造	備考
1 陶生土器	壺・口縁部	淡褐色	1mm未満の砂粒多く含む。	外反する口縁端部に刻み。	V層			
2 陶生土器	壺・底部	暗褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	狭い平底。	V層	底径: 4.0 残存高: 3.0	底径: 1 / 4 周残存。	
3 陶生土器	杯蓋	淡褐色	1mm粒のチャート含む。	口縁部と天井部の境の後は不規則。	V層	口径: 10.5 (復元) 残高: 2.6 残存高: 3.3	口縫部 1 / 6 周残存。	
4 陶生土器 (火塗)	杯身	灰色	1mm粒のチャート含む。	内横ぎみの口縁。	V層	口径: 11.5 (復元) 底径: 14.0 (復元) 残存高: 3.3	受部 1 / 8 周残存。	
5 陶生土器	蓋または煙草器	灰色	1mm未満の長石含む。	2条の低い凸部と波状文。	V層	基盤厚: 0.7		
6 陶生土器	杯蓋	灰色	mm未満の長石含む。	口縁端部は下方に圓曲。	V層			
7 陶生土器	蓋	灰色	mm未満の長石含む。	口縫端部は「て」字状に屈曲。	V層			
8 陶生土器 (重複系)	片口縫・口縫部	灰白色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	口縫端部が立ち上がり引き凹み。	V層	残存高: 3.0		
9 陶生土器 (重複系)	片口縫・口縫部	灰白色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	口縫端部が肥厚し、下にはつまみ出される。	V層	残存高: 4.7		
10 陶生土器 (重複系)	片口縫・口縫部	灰白色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	口縫端部が屈曲して上方に立ち上がる。	V層	残存高: 4.5		
11 土師器	蓋または皿	灰褐色	1mm未満の長石含む。	口縫端部の外反し、内面に1枚の丸印。	V層	残存高: 2.2		
12 土師質土器	皿	淡褐色	1mm未満のチャート含む。	内周する2線。	V層	残存高: 1.8		
13 上輪質土器	皿	褐色	1mm未満の長石含む。	口縫部と底部の境に段を有する。	V層	底径: 1.7		
14 土師質土器	盆・口縫部	褐色	1mm未満の細かい砂粒含む。	口縫端部内面が肥厚。	V層	口径: 20.0 (復元) 残存高: 2.8	外面に保付箇、 口縫部 1 / 10 周残存。	
15 土師質土器	盆・口縫部	淡褐色	1mm未満の石系、チャート多く含む。	口縫部と底の間は細く、口縫部端部が外反。	V層	口径: 24.0 (復元) 残存高: 5.2	外面に保付箇、 口縫部 1 / 12 周残存。	
16 瓦質土器	釜・口縫部	灰・暗褐色	1mm未満のチャート多く含む。	口縫部内面に強いナテ。底部は約1mmの距離。	V層	残存高: 6.3		
17 瓦質土器	釜・脚部	灰・暗褐色	1mm未満のチャート多く含む。	体部下部に墻入部とよる1mmの距離。	V層	残存高: 9.0	脚部下半破損。	
18 角磁	瓶・口縫部	蔚黄色		口縫端部がやや外反ぎ、外側に無縫合。	V層	残存高: 9.0		
19 角磁	底部	蔚黄色		堅い高台。胎は表面及び内側に凹凸がある。	V層	高台径: 5.5 残存高: 1.2		
20 白磁	瓶・口縫部	乳白色		口縫端部は土附り付けられていた。	V層	全体に貫入。 残存高: 2.0		
21 白磁	瓶・底部	乳白色		高台表面が4ヶ所で残して割れ付ける。	V層	高台径: 4.0 残存高: 1.2		
22 反転陶器	皿・口縫部	黃褐色		「て」字形に屈曲する縫合、内面には小物がかかる。	V層	口径: 11.0 (復元)	口縫部 1 / 8 周残存。	
23 陶器(海貝 貝殻)	おろし皿	灰白色	砂粒はほとんど含まず。	内面底部に格子状の沈澱。	V層	基盤厚: 0.7		
24 土器		灰白色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	内面に粗粒の陶質。	V層	長さ: 4.2 幅: 3.0 (復元) 孔径: 1.6 (復元)		
25 土器		赤褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	内面に粗方向の擦痕。	V層	残存長: 3.9 幅: 3.0 (復元) 孔径: 1.2 (復元)		
26 陶器 (古墳)	杯身	灰色	砂粒はほとんど含まず。	内横ぎみの口縁。	V層	口径: 11.0 (復元) 底径: 1.6 (復元) 残存高: 3.0	受部 1 / 8 周残存。	
27 土器	高杯	褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	脚部は大きく外へひらく。	V層	残存高: 3.5		
28 土器	壺・口縫部	褐色	1mm未満の長石含む。	口縫部内側に強いナテ。	301B	内側に保付箇。		
29 土器	小型壺	褐色	1mm未満の長石含む。	底部からの底部は真っ直ぐ伸びる傾向がある。	301A	脚部最大径: 7.2 残存高: 5.2		
30 土器	壺・底部	灰褐色	1~2mmの長石、チャート、石英多く含む。	胎体底部。	301B	底径: 4.8 底径: 2.5 残存高: 2.5		
31 石臼		白色				8.0×6.7×5.6	3ヶ所に絞れの痕跡。	
32 陶生土器	皿	淡褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	堅い底面。胎体上半で最大径になる。単孔口縫。	402	口径: 18.7 底径: 25.5 高さ: 3.8	ほぼ完形。	
33 陶生土器	舟	暗褐色	1~2mmの長石、チャート、石英多く含む。	外表面に數多の凹凸があり、胎体に削り落とす跡。	402	外表面はハゲタマ。内面は削り落とす跡でケツメイ。	結合破片少ない。	
34 陶生土器	高杯・脚部	褐色	1mmの長石多く含む。	底辺から上の脚部は3方向の凹凸。	402	脚部は3方向のミガキ。		
35 陶生土器	壺・底部	淡褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	外表面は粗方向のミガキ。	403	脚部はナメ。内面はハゲタマ。		
36 陶器 (古墳)	杯蓋	灰色	1mm未満の長石含む。	口縫部と天井部の壇は1箇所のみ。	403	大井井の外反時計回りの回転ヘラタリ。	受部 1 / 6 周残存。	
37 トロボ	高杯	暗褐色	1mm未満の長石わざかに含む。		403	内面はハゲタマ。	受部 1 / 8 周残存。	
38 陶生土器	壺・底部	褐色	1mm未満の長石多く含む。	平底。	403	口径: 8.0 (復元) 底径: 1.7	口径: 11.0 (復元) 底径: 3.5	
39 陶文土器	口縫部	暗褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	口縫部内面に刻み。	403	外縫部に保付箇、底径 1 / 3 周残存。		
40 陶文土器	底部	暗褐色	1mm未満の長石、チャート多く含む。	單純口縫。	403	外縫部に保付箇。		
41 本製品	石突状加工品	宣和酒器		種の石突状の形態で内側をくり抜く。	403	高さ: 12.0 幅: 4.0×3.0		
42 瓦質	宣和酒器	宣和酒器		宣和酒器は北宋で、初跡は1119年。遼北宣和酒器は直径24cmを越えるものに対して、本出土品は23cmであるうえ、文字の跡には不明瞭なところから、南朝銘とされる。	403	口径: 4.3 孔径: 0.6		

本庄町遺跡出土遺物観察表



第3道構面全景



SD301完掘状况



第4道構面全景



SX402完掘状况



SX402遺物出土状况



SX402遺物出土状况



第5道構面全景



VIIc層縄文土器出土状况

## ひがしなだ 15. 東灘No.22地点遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

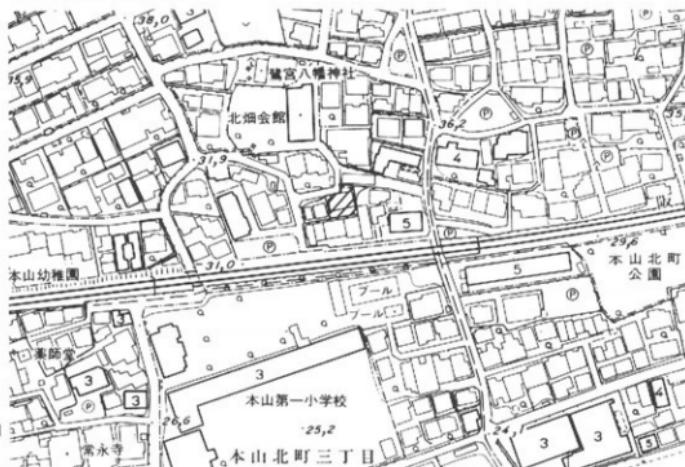
東灘No.22地点遺跡は、東灘区本山北町周辺に広がる遺跡である。

付近では古くから弥生土器片が散布することが知られており、近年になって宅地開発などで調査が数回行われたが、いずれも明確な遺構を検出するに至っていない。これは主に近世～近代にかけての畠地耕作などによる削平を受けたことが要因といえる。ただ、明確な遺構の発見はないものの、遺物の出土はみられ、周辺に集落址などの遺構・遺物が存在するものと考えられている。

調査地は、保久良神社が鎮座する金鳥山より派生する丘陵の先端部に位置しており、標高約32mを測る。調査地の南を走る阪急電鉄神戸線を境に丘陵部から段丘面への地形変換が認められ、線路敷の北と南では比高差約4mを測る。これ以南、海岸部までは段丘から扇状地へと緩やかに傾斜した地形が続く。

周辺の遺跡では、銅戈が発見された保久良神社遺跡・金鳥山遺跡などの弥生時代の高地性集落、南側の段丘上に営まれた本山北町遺跡・本山遺跡などの集落遺跡が挙げられる。

今回の調査は、住宅建設に伴う発掘調査で、埋蔵文化財に影響を及ぼすと考えられる擁壁部分の調査を行った。



### 2. 調査の概要

**基本層序** 調査区内の基本層序は、上から盛土層・耕土層・暗灰色砂性粘質土層（遺物包含層）、褐色礫混砂質土（地山）である。

暗灰色砂性粘質土層上面及び褐色礫混砂質土層で遺構精査を行ったが、いずれの層面でも遺構は確認されなかった。遺物は暗灰色砂性粘質土・褐色礫混砂質土からそれぞれ出土しているが、磨耗がひどく、また出土量も僅かである。近在に遺構が存在する可能性は低いものと考えられる。

3. まとめ 今回の調査でも、従前の調査結果と同様、中世の須恵器・土師器、弥生土器が流れ込みと考えられる状況で確認されたのみで遺構は確認されなかった。調査地周辺の地形は傾斜がきつく、後世の畠地耕作、あるいは宅地造成時にかなりの地形改変を受けているようだが、遺物の混じり方からすると、やはり調査地の北方の丘陵上に遺跡が存在し、そこからの流れ込みによる遺物が確認されたと考えるのが妥当と思われる。

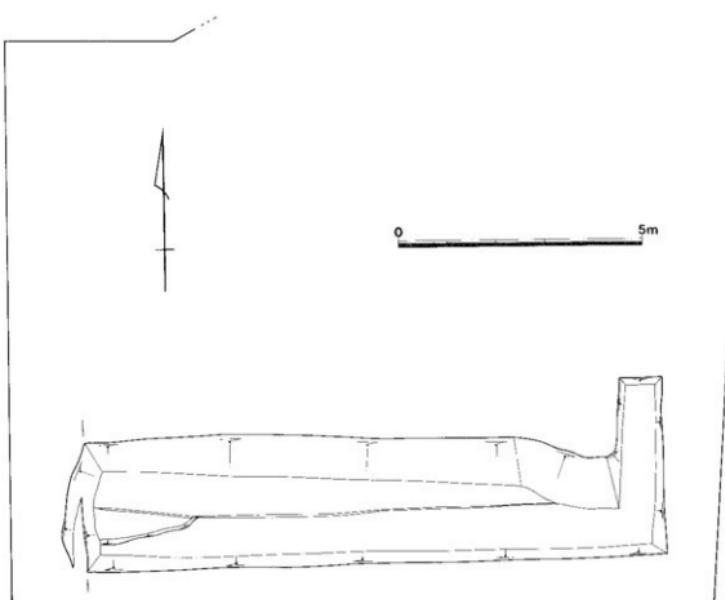


fig. 121 調査区平面図

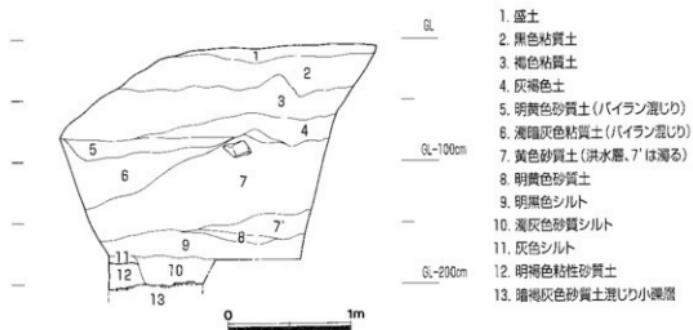


fig. 122 調査区断面図

## しのはら 16. 篠原遺跡 第16次調査

### 1. はじめに

当調査区は、篠原遺跡の北部に位置する。篠原遺跡については、現在まで、15次にわたる調査が実施されている。その結果、縄文時代～中近世の、複合遺跡であることが判明してきた。とくに、第2次調査における縄文時代晚期の遮光器土偶や第12次調査における弥生時代後期の小型彷彿鏡の出土が著名である。



fig. 123  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査地は、南北 16m、東西 10m の長方形で、北から南へと緩やかに傾斜している。

基本層序は、層厚が 60cm ほどの盛土の下に、中世の遺物を含む包含層がはじまり、地表下約 120cm で明褐色土（縄文時代遺構面）に至る。

#### 第1遺構面

表土直下 2～3 層にわたる、包含層を挟んで G. L. -40～70cm で第1遺構面にいたる。土坑 2 基、溝 1 条および多数の耕作痕を検出した。

#### S K01

一辺 2.5m ほどの隅丸方形の土坑である。埋土が他の遺構とやや異なり、近世の遺物が出土している。比較的新しい時期の遺構のようである。

#### S K02

調査区中央部において検出された南北 4.0m 以上、東西 2.0m 以上、深さ 10cm ほどの土坑である。中世の遺物が少量出土したが、耕作痕を切る。

#### S D01

調査区を東西に横切る幅 80cm ほどの溝である。この溝を境として地形に沿うように、南北に 10cm ほどの段が造られており、耕作痕と切り合いもなく方向も揃えることから、共に中世の圃場面に伴うものと考えられる。また、この圃場面を南北方向の幅 20～40cm、深さ 10cm 前後の明瞭な耕作痕が数 cm の間隔で検出された。

#### 耕作痕

他に、S D01を挟んで南側に東西方向の殆ど削平された耕作痕が認められた。

- 第2遺構面** 第1遺構面下、古墳時代の包含層を挟んで第2遺構面となる。竪穴住居1棟、ピット8基を検出した。
- S B01 調査区の南東隅において検出された竪穴住居である。北側約半分が未調査区へ続いている。かなり削平を受けており、周壁溝および柱穴を数基検出した。遺物は、細片のみで時期については不明である。
- 第3遺構面** 地表面より80~120cmで明褐色灰色土をベースとする第3遺構面となる。この面で土坑3基、溝1条、ピット5基と落ち込み状遺構を検出した。縄文時代晚期の遺構面と考えられる。
- S D10 調査区の東側において検出された幅120~80cm、深さ40cmほどの弧状をえがく溝である。上面において、炭層がみられた。
- S K10 調査区東辺において半分だけ検出された、直径1.2mほどの円形の土坑である。拳大の石が多く含まれていた。

**3. まとめ** 今回の調査は、調査面積が狭かったこともあり、検出された遺構等についても、性格付けをすることは難しい。篠原遺跡は、非常に多様なありかたをする遺跡であるにもかかわらず、調査の機会が比較的少ないこともあり、未だにその実態について不明な部分も多い。今後、このような地道な小規模調査の成果の積み重ねにより、次第に遺跡の全貌が明らかにされていくであろう。

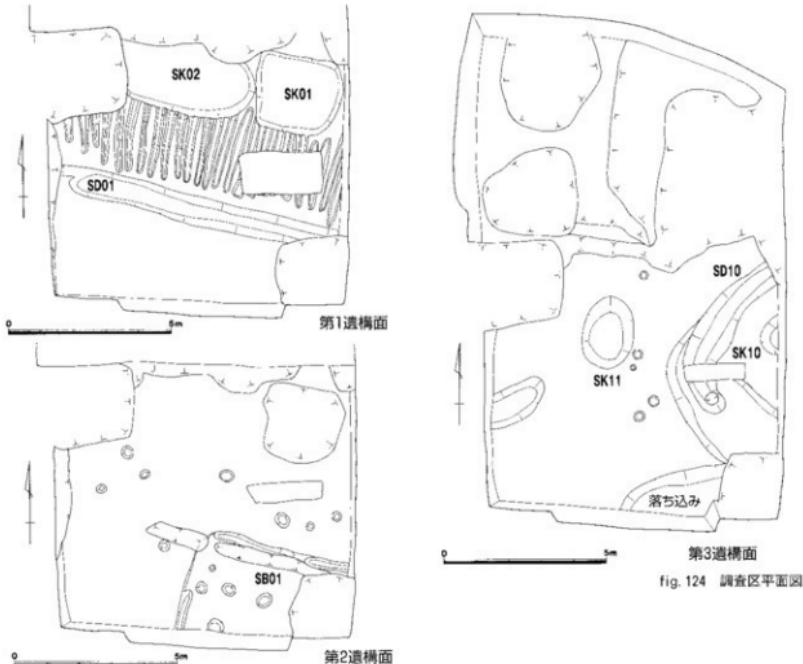


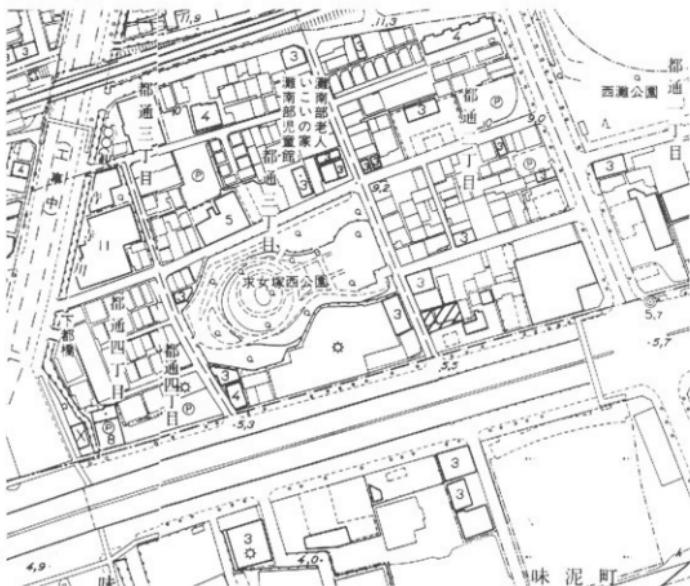
fig. 124 調査区平面図

## にしもと めづか 17. 西求女塚古墳 第9次調査

## 1. はじめに

西求女塚古墳は、六甲山南麓にひろがる扇状地末端に立地しており、標高 6.0m の微高地上に築造されている。

今回の調査地は、西求女塚古墳の前方部の南西約 30m に位置しており、第4次調査や第6次調査で確認された周溝の可能性のある落ち込みあるいは溝状遺構が検出する可能性が予想された。



### 地割れ

また、調査区の北東隅から中央部北側付近にかけて東西方向にのびる地割れの跡が、確認されている。地割れの跡は、総延長6.0m以上、幅30cm~1.0m、深さ50cm~70cm以上を測る。なお、通産省地質研究所の寒川旭先生により、この地割れは、海岸部付近で、地震が発生した際に、『はらみ出し現象』と呼ばれる、海岸際の面が、海側に強く引っ張られたことによって生じたと考えられているものであることが判明した。

この地割れの中に流入した土砂からは、遺物が全く出土しなかった。しかし、土層の堆積状況から見て、奈良時代～平安時代の遺物包含層を切っていないため、それ以前のものと考えられる。

### 下層

また下層についてもトレンチを設定し地表下1.8mまで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. まとめ

今回の調査では、調査着手前に予想していた周溝等の西求女塚古墳に関連する可能性のある遺構・遺物は、全く検出されなかつたが、奈良時代～平安時代以前に発生した地震によって生じた地割れの跡が、確認された。

今後は、周辺の調査によって、この地震の規模や時期が明らかになっていくものと考えられる。



図.126 地震痕跡

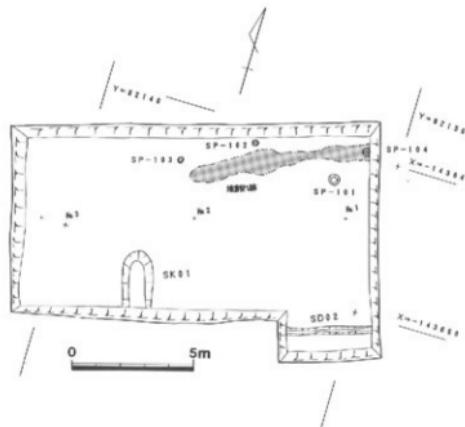


fig. 127 調査区平面図

## にしもと めづか 18. 西求女塚古墳 第10次調査

### 1. はじめに

西求女塚古墳は、六甲山麓の扇状地末端に位置する前方後方墳で、その築造年代は3世紀末～4世紀初頭と推定されている。

古墳本体とその周辺は、数次に及ぶ調査が実施され、後方部の埋葬主体から三角縁神獣鏡7面を含む12面の船軸続が出土している。また、周辺の調査では、周溝と推定される落ち込みと、『敏馬の泊』との関わりが考えられる奈良～平安時代の遺構が検出されている。



fig. 128  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建築に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

#### 基本層序

調査地の基本層序は、1. 盛土・搅乱、2. 暗灰色シルト混じり細砂、3. 黄灰色細砂、4. 黒色シルト混じり細砂～中砂、5. 黄褐色粗砂、6. 暗灰褐色極細砂～細砂、7. 暗褐色粗砂である。

このうち、4層上面が遺構検出面である。この面は南西に向かって緩やかに傾斜している。

#### 検出遺構

調査区は搅乱が著しいが、調査区中央部東側で直径40cm、深さ15cmの落ち込みを1基検出した。埋土に土器を含まず、時期は不明である。

この面での調査終了後、工事影響レベルまで掘り下げ、精査したが、遺構は検出されなかつた。

#### 出土遺物

遺構検出面直上より、土器が10ℓコンテナ1箱出土している。その殆どが小破片で時

期の特定は困難であるが、古墳時代後期と平安時代の土器が含まれている。

3. ま と め 今回の調査では調査範囲が限られていたため、時期不明の落ち込み1基のみの確認にとどまった。土器も小破片ばかりで二次堆積の可能性を考えられ、当該地は文化財の希薄な場所であると言える。

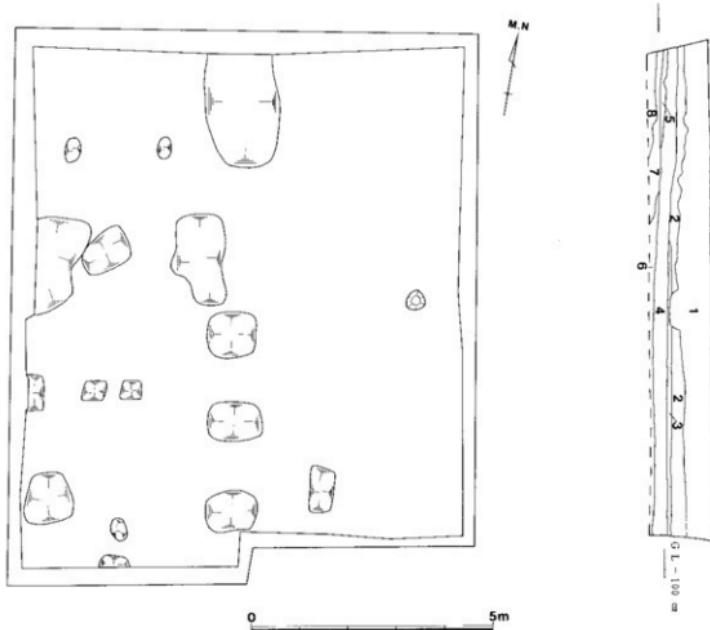


fig. 129 調査区平面図・断面図

## 19. とが 都賀遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

都賀遺跡は、六甲山麓の都賀川東岸、標高約40m前後の局状地上に立地している。昭和62年に実施した試掘調査で、弥生時代の遺物包含層が確認され、その存在が明らかになった。

それ以降、7次にわたる調査の結果、縄文時代早期の遺構をはじめ、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居、奈良時代末～中世の掘立柱建物などが検出されている。



fig. 130  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建築に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

**基本層序**　調査地の基本層序は、第1層現代の盛土、第2層黒褐色細砂、第3層灰褐色礫混じり細砂～中砂（人頭大の礫を多量に含む）である。このうち、第2層が遺物包含層である。

**検出遺構**　調査区西側から東側に向かって傾斜している土石流を検出した。北東から南西にかけての流れで、人頭大の礫を多数含んでいる。調査区の東側は土石流の上に弥生時代後期～中世の遺物包含層が堆積している。工事影響深度までの調査であるので、この部分は遺構面には到達しなかった。

**3. まとめ**　今回の調査では調査範囲が限られていたことと、工事影響深度以下の調査を実施していないために、遺構を検出することができなかった。

しかしながら、これまでの調査で検出された土石流が今回の調査でも検出され、広範囲にわたりこの付近を土石流が覆っていることが確認された。

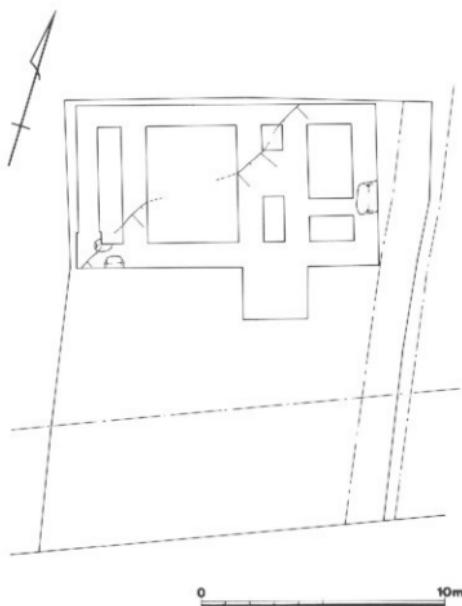


fig. 131  
調査区平面図

0 10m



fig. 132  
調査区全景

## 20. 都賀遺跡 第9次調査

1. はじめに

都賀遺跡は、六甲山南麓に流れる都賀川左岸に位置する標高40m前後の扇状地上に立地している。昭和62年に試掘調査が行われ、弥生時代の遺物包含層が確認され、はじめて遺跡の存在が明らかとなった。

これまでの調査の結果、縄文時代早期の遺物包含層・土坑・弥生時代中期の方形周溝墓・土坑・溝・弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の堅穴住居・奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物・土坑・溝など、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・ピット、江戸時代の溝・土坑などを検出している。



fig. 133  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査地は、都賀遺跡に南接したため、事前に試掘調査を実施したところ遺物包含層を確認した。その結果をもとに工事影響範囲を対象に発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、盛土・近現代整地層・旧耕土層・乳茶褐色粘質土（第1遺構面）、黒褐色粘質土（包含層）、茶褐色極細砂シルト（第2遺構面）、暗茶褐色極細砂シルト、暗褐色シルト質細砂円角礫（土石流層）、茶褐色砂質土（第3遺構面）、淡黄褐色砂質土（地山）となっている。北半調査区では、宅地造成時の搅乱のため、暗褐色シルト質細砂円角礫（土石流層）が、かろうじて残る状態であった。

近現代遺構

北半調査区の北壁に半分かかる形で石組みの井戸と同じ壁面西端には共同便所と思われる大便器が2基並んで検出した。また、調査区のほぼ中央で防空壕と思われるものを1基確認した。規模は、平面が南北3m東西2.6mの長方形で深さ1.5mである。南東隅に三段の階段が削りだしており、壁面に沿うように二間三間の柱跡を検出した。南調査区の長方形の地下収納庫と思われるものからは、未開封の「大日本ビール」2本と日本酒の瓶2本が出土した。

第1遺構面 南半調査区では、現在の町割りとほぼ同一の東西方向に鋤溝を多数検出した。この鋤溝は、鋤先が両端で突出する風呂鋤と呼ばれるタイプのものである。これは、当地が耕作地としては石の多い固い土壌であったことから風呂鋤を使用して開墾していくものと思われる。また、鋤溝とは異なる方向の溝、2条を検出した。これは、幅約50cm深さ約15cmの規模で北西から南東方向に検出した。出土遺物に明確に時期を示すものが出土しなかつたため、時期と溝の用途は不明であるが、鋤溝との切り合い関係から鋤溝よりも古いものと思われる。鋤溝の時期としては、出土遺物から概ね近世（江戸時代）以降の物と思われる。

北と南に調査区を分けていた旧道の下に沿うように溝（SD120）を検出した。この溝の南肩は旧道に伴う埋設施設と側溝により削平されているため幅は明確ではないが、幅2m以上、深さ50cmの規模の溝である。溝の中からは、多量の近世陶磁器と獸骨が出土した。特に、東端の溝の底を掘り込んだ用途不明遺構（SX101）からは、獸の頸部の骨などがまとまって投棄されたように出土した。歯の形状から、牛の骨と思われる。

北西隅では、北東から南西方向へ流れる溝（SD121）を検出した。この溝の西肩についても調査区の外になるため幅が明確ではないが、幅2m以上、深さ80cmの規模の溝である。溝の中からは、多量の中近世陶磁器と獸骨が出土した。出土遺物から、SD120よりも古い段階で構築された溝と思われる。

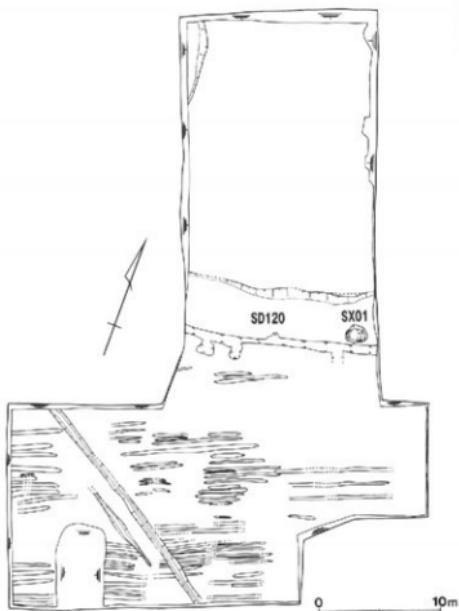


fig. 134 第1遺構面平面図



fig. 135 SX01



fig. 136 SX101平面図

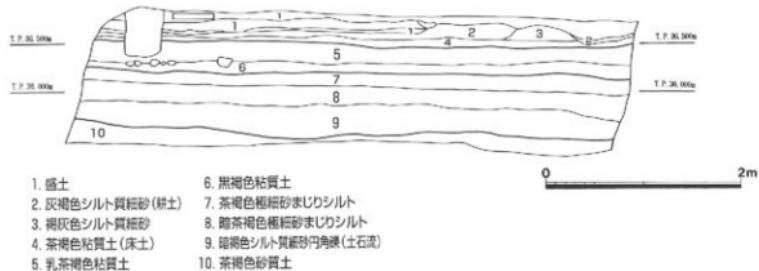


fig. 137 調査区断面図

**第2遺構面** 第2遺構面は、南半調査区でのみ検出した。主な遺構としては、ピット5基と溝1条である。ピットは、直径20cm前後の大きさのもの8基が南半調査区の北東に固まって検出されたが、建物としてはまとまらない。南半調査区の南東隅において溝(SD201)を検出した。この溝の、西肩についても調査区の外になるため幅が明確ではないが、幅2m以上、深さ80cmの規模の溝である。溝の中からは、多量の弥生時代後期の土器片が出土した。

**第3遺構面** 第3遺構面は土石流の下から検出した面で、遺構は直径2~3mの不定形な不明遺構(SX301~315)のみである。これらの遺構は、埋没過程において地山の土を中層から上面まで巻き上げたものが多いことから、土石流に押し流された木などの痕跡と思われる。SX301とSX312からはサヌカイトのチップとスクレイパー・石鎌が出土した。その他の遺物は出土しなかった。

fig. 138  
土石流検出状況

3. まとめ 今回の調査では今までの調査で検出してきた弥生時代中期を中心とする遺構は存在せず、縄文時代早期から中世にかけての明確な遺構・遺物も確認できなかった。しかし、弥生時代後期の溝が検出され、都賀遺跡の南限を当調査範囲の南に特定することができた。また、弥生時代後期以前に土石流災害が発生しているが遺物がほとんどないことから周辺に集落の存在は推定できない。近世においては、調査区中央を東西に流れるSD120を境として北半は集落が形成され、南半には耕作地が営まれていたものと思われる。

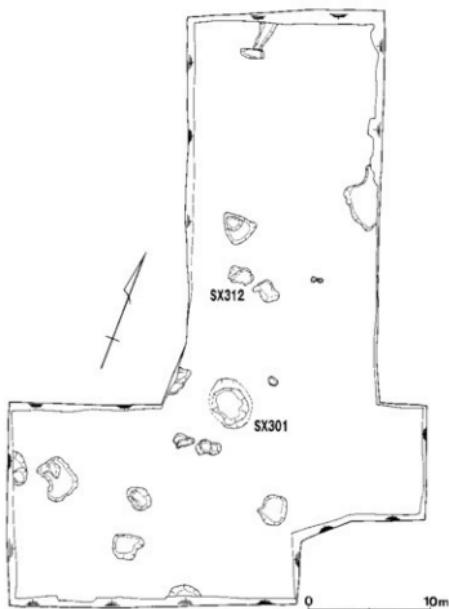


fig. 139 第3遺構面平面図

## にしごうこ さかぐらぐん 21. 西郷古酒蔵群 第2次調査

### 1. はじめに

当該地である月桂冠北蔵は、日本一の酒蔵として有名な灘五郷の内、都賀川の河口付近一帯に広がる「西郷」と呼ばれる地域に位置している。北蔵の西約 250m には都賀川が、南約 100m には蔵築造当時の海岸線があり、標高約 2.0m の砂丘上に位置している。

酒蔵は、神戸におけるひとつのシンボル的な存在であったが、震災によってその殆どが倒壊し、早晚には、古い酒蔵の様子は忘れ去られる危機にある。近現代の酒造史においても、既に消えてしまった技術や伝統が多く存在し、近現代の産業史の中で、生産施設に係わるもの、生産遺構として位置づけることによって、発掘調査を行い、記録保存を行う必要性が高まっている。特に、神戸市における酒造関連遺構は、全国的にみても貴重な存在であり、近現代の酒造史においても重要な位置を占めている。

今回の調査は、酒蔵関連の調査として実施されたもので、神戸市内において、3 例目となる。また、灘五郷の内、西郷地区内では、沢之鶴大石蔵に続いて 2 例目となる調査である。



**大 蔵** 大蔵は、調査区の北端に僅かにかかる形で調査を行った。その結果、大蔵の南側の石垣の一部とその根石の抜き取り穴を検出した。また、大蔵と前蔵を繋ぐ通路も検出した。

大蔵は最初、前蔵から半間北に離れた場所に築かれていたようである。そして、築造後、まもなく通路が築かれたようである。このことは、建物の石垣と通路の石垣が高さが一致するものの、その積み方が、かなり隙間のある荒い積み方となっており、建物の石垣と一緒に築造した石垣にしては違があり、後に、溝部分に石材を嵌め込んで作ったと考えられる。その後、この蔵全体が火災に逢うようであり、その時期に大蔵も火災によって焼失している。この後、大蔵は建て替えられるが、その位置は、前蔵からやや離した地点に前蔵とやや方向を異なるようにして建てられるようである。

**前 蔵** 前蔵は、大蔵の南にあり、大蔵と前蔵は典型的な並び蔵の型式をとる。前蔵の築造には、黒灰色の細砂を叩き締めてそれをベースとしてその上に礎石や石垣を築いており、基礎部分において一切掘り込み地業をおこなっていない。礎石や石垣を築いた後、前蔵内部を砂等で盛土して床面を築いている。前蔵の東側には、槽場が築かれており、3回の作り替えが行われている。

**第4槽場** 一番新しい槽場は、前蔵北東端に長辺を東西方向にむけて築かれている。コンクリート造りで、南側に煉瓦造りの階段を設けるものである。戦災の面と一致しており、そのころには存在していた可能性が高い。

**第3槽場** 前蔵の東側に長辺を南北にむけて築かれている。石造りで、西側に木の階段を設けるものである。垂壺の口縁部に巻かれていたコンクリートは出土したが、その他のものは、すべて抜き取られていた。よって詳細な槽場の状況を復元することは困難である。

石炭ガラなどで埋め戻されており、戦災面より下層にあたることから戦災以前と考えられ、全体が火災に逢う時期よりは後出するものである。昭和期の煉瓦が埋没していることからみても昭和10年前後の



fig. 141 第1遺構面平面図



fig. 142 第2遺構面平面図

時期が考えられる。

**第2槽場** 前蔵の中央や東側に長辺を東西にむけて築かれている。第2槽場に切られており、僅かに断面によって確認したのみである。底に築造時に使用したとみられる石材を検出したことから、石組の槽場とみられるが、詳細は不明である。

**第1槽場** 前蔵の東南側に長辺を東西にむけて築かれている。石造りで、北側に木の階段を設けるものである。第3槽場に切られており、僅かに断面によって確認したのみである。底に築造時に使用したとみられる石材を検出したことから、石組の槽場とみられるが、詳細は不明である。切り込み面が、全体の火災に逢う面（焼土面）と一致することから、火災の時期には存在していたと考えられる。

**釜屋** 前蔵の南に隣接する場所が釜屋にある。前蔵建築当初には前庭であった可能性がある。後に、掘立柱建物等が築かれ、店舗や会所部屋として使用された時期もあったようである。前蔵南石垣に接する様にして掘り込み地業を伴う礎石列を検出した。この礎石の掘形は、焼土層直上から切り込まれており、また石組み釜場の掘形を切り込んでいることから、釜場より後出であり、全体が焼失した後に、釜屋再建時に設置されたものと考えられる。柱間は、3mと4mがある。

**石組釜場** 釜屋に最初に築かれた釜場は、大小2基をセットとするもので、石を組み、漆喰を上から塗って耐火処置をおこなって作るものである。焚き口の側面は面取りを行った方形の石材を組み上げて石垣としており、半地下状となっている。

当初の焚き口については不明であるが、大正年間に作られた焚き口は、煉瓦の扉をつくり、大小2基の焚き口を持つものである。この焚き口の煉瓦扉に使用された煉瓦は全てJIS規格に合わない大きさのもので、JIS規格が制定されるのが大正14年であることから、恐らくそれ以前に製造された煉瓦を使用して築かれた煉瓦扉と考えられる。

ただし、周辺部には、少なくとも2種類の耐火煉瓦が使用されており、そのうち、古いものは、明治



fig. 143 第3造構面平面図

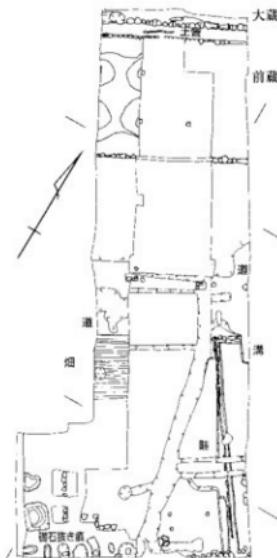


fig. 144 第4造構面平面図

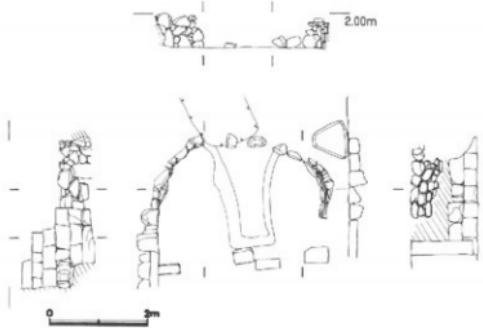


fig. 145 石組窯平面図・断面図



fig. 146 石組窯

20年から25年の間に製造された白煉瓦である。おそらく、部分的にこのころから釜場には耐火煉瓦が使用されていたものとみられる。それともうひとつの煉瓦は昭和10年前後に製造された耐火煉瓦であり、少なくとも2度の造り替えが行われた可能性が窺われる。

石組みの釜場は、江戸期より古い伝統を受け継いだものであり、貴重な遺構である。しかし、今回検出した石組み釜の場合、築造年代はあまり明確ではない。白煉瓦の使用から明治20年代には既に存在していたことがわかるが、江戸期にまで遡るかどうかに関しては、不明である。

**煉瓦釜場** 耐火煉瓦を使用する釜場で、北側にある北釜は直径166cmを測る小釜、南側にある南釜は、直径180cmを測る大釜である。重油用に築かれたもので、ロート状のバーナータイプを焚き口に設け、空気口を設けている。焚き口は余分な空気が入り込まないように石炭用の焚き口を狭くし、煉瓦で詰めている。また、炎の当たる付近に煉瓦を斜めに立てかけたように設置して炎を上に立ちのぼらせる構造も特徴のひとつである。

石組みの釜場は焼土面に覆われており、火災時には存在していたと考えられる。また、煉瓦釜は、昭和30年代前半に多く作られた形式であり、その頃のものであろう。煉瓦釜はその後コンクリートが巻かれ、蒸気式に変化するようであり、これが昭和40年代と考えられる。蒸気式への変化に伴って煙道もその役目を終えるようである。

**煙道** 煙道は釜場から南に向かって、釜屋を斜めに横切るようにして築かれている。煉瓦によって作られているが、使用されている煉瓦はJIS規格に合わないもので、大正年間の築造と考えられる。掘形としては、焼土面の後の建て替え面をさらに切っていることから大正年間でも後半の頃のものと考えられる。なお、築造当初の釜場に伴う煙道もほぼ同じ方向に伸びていたと考えられるが、そ



fig. 147 レンガ組窯

の長さはかなり短いものであることが断面により確認されている。煙道は、石炭で釜を焚いた場合、煤と灰で詰まり易いため、中を掃除するために入れる空間を設けている。その上で釜屋内の移動の邪魔にならない様に低く作られている。

掘形の状況から一度補修されており、戦後の建て替え時に行われたものと考えられる。このことから、煙道は、大正期から昭和40年代まで存続していたと考えられる。

釜屋は火災に合う前後から奥行5間とされていたが、火災後、釜屋の建て替え、一部変更が行われた際に、4間に減少する。この時に、釜屋南面に石垣が築かれるが、これは焼土面の上の建て替えによる整地層を切り込んでおり、火災からやや時期をおいて築かれたことが判る。石垣より南には1間分張出があり、中央部分は入口となる。

**地下室** 釜屋西側に地下室を検出した。地下室の東に階段状の施設を設けるもので、東壁は、自然石（川原石）を乱雜に積み上げたもので、隙間には漆喰が充填されている。石垣の掘形は、焼土面の後の建て替えに伴う整地層を切り込んでおり、石垣や煙道とほぼ同時に築かれたものとみられる。南には、花崗岩の面取りされた方形の石材が2～3段、北面して積まれている。戦災の面に覆われておりそれ以前に埋没していることが確認されている。かなりの砂によって埋められ、一部にラミナ痕も認められる。このことから昭和期における洪水が考えられるが、この地域は、阪神大水害の被害にあっていないことが確認している。おそらく海岸地帯に多大な被害をもたらした室戸台風（昭和8年）の可能性が高いと考えられる。

**板 間** 釜場の南に東柱の礎石とみられる石材が3個検出されている。設置した面と据えるための掘形から、火災後の建て替えに伴うものと考えられる。このことから、釜場の南には、会所部屋のような部屋が設けられていたものとみられる。

**中 庭** 釜屋の南には、中央部分が庭となっており、桶などを干す干場などに使用されていたものとみられる。

前蔵等が築かれた当初は、釜屋の南に道路があり、道路の南に細い溝が築かれていた。この溝より南は当初畠であったことが、畠の歴の検出により確認できた。洪水等の被害により明治20年代前後に耕作は断念されたようである。

**会所部屋** 調査区南西部に東西方向の建物があった。これを会所部屋という。当初は、礎石の建



fig. 148 レンガ組煙道



fig. 149 地下室石垣

物であったが、後に煉瓦塀の建物に変わるものである。全体が焼土面に覆われており、火災以前からここに建物があったことがわかる。建物の中には、東柱に伴う小ぶりの礎石が据えられており、酒造蔵のような土間ではなく、張り床が行われていた建物であり、会所部屋等の用途が考えられる。焼失後の建て替えに伴うと思われる煉瓦が、石垣の直上に残されていた。その煉瓦が、大正期の3年から5年頃に焼かれた煉瓦の刻印と酷似する刻印をもつことから、立て替えの時期はその頃に行われたものと考えられる。

また、建物の東には、雨落ち溝が設けられていたが、火災と相前後して埋没しており、焼失後に建てられた建物の雨垂れの跡も検出している。これによって、火災の相前後する時期の建物規模のうち、東側の軒先部分を限定することが可能となる。

なお、会所部屋自身もその大半が調査区外となるため、建物規模や詳細な変遷については不明な点も多い。

**事務所** 調査区南東で検出した建物である。殆どが調査区外に伸びるため、規模等は不明である。火災を前後して建物は大きく変化するようである。

**3. まとめ** 今回の調査では、西郷地区では初となる石組の釜場を検出したことは大きな成果といえる。

また、今回の調査で明らかになったことを総合すると、北に大蔵があり、半間の蔵間露地（排水路）を挟んで前蔵があるという典型的な並び蔵の様式をとるものである。前蔵の前に釜屋その前に中庭があり、南に門を設け、中庭を閉む様にして、建物を配置している。また、槽場は半地下式の構造をとるものである。

文献によれば、明治から終戦までは松岡氏所有の蔵であったようで、明治30年代には千石程の造りであったようである。当時の灘五郷の中では小さい造りの方に属しており、そのため、蔵自体もやや規模の小さいものといえる。しかし、そのために、配置が単純であり、明治40年から大正8年頃に書かれた灘の蔵配置とほぼ一致しており、大正期の蔵配置の典型的な事例のひとつとしてあげられるものと考えられる。



fig. 150 調査区全景

## 22. 脇浜西遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

脇浜西遺跡は、西郷川の右岸標高5m前後の海岸線辺砂堆上に位置している。現在の海岸線から約550m、明治18年作成の『仮製図』から復元される海岸線より約50m内陸に立地している。

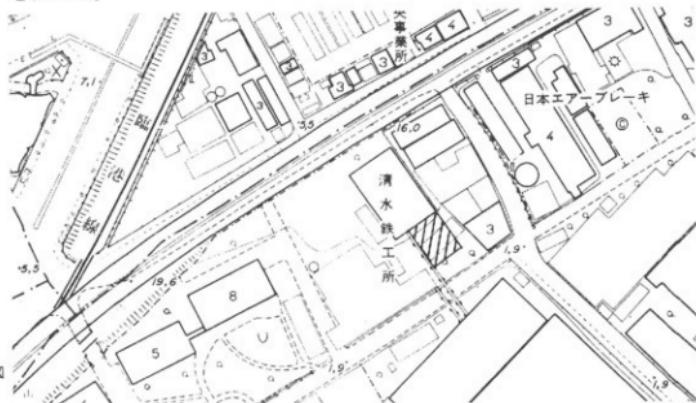


fig. 151  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査は、平成8年11月、平成9年6月に実施した試掘調査の結果に基づいて、南北27m、東西20mの範囲について実施した。その結果、現地表下120cmで室町時代の遺物を含む遺物包含層の下に暗黄褐色粘性砂質土の遺構面を検出した。この遺構面では、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑3基、不明遺構1ヶ所を検出した。

なお、遺構を検出した暗黄褐色粘性砂質土以下の層においては、遺物包含層・遺構は発見されなかった。

#### S B01

調査区南東部で検出した掘立柱建物である。東西8.2m、南北3.6m以上の規模で、東西5間、南北2間以上と推定される。建物の南側と北側は工場基礎の掘形によって壊滅していると考えられる。建物の掘形は、20cm～40cm前後の円形で、30cm～40cmの深さを残している。また、直径20cm前後の柱痕跡を残し、30cm大の平な河原石を礎盤として用いている柱掘形も検出した。建物の方向は南北の推定梁方向で北35°西である。

#### S D01

調査区北西部で検出した溝である。溝の北部でS D02を切って掘られている。幅50cm、深さ15cm～20cmで断面形はV字形をしている。溝の北側・南側が工場基礎の掘形によつて壊滅している。溝の埋土からは、須恵器・土師器・瓦器などが出土した。

#### S D02

調査区北西部で検出したコの字形に巡る溝である。幅1.4～1.2m前後で、深さは25cm前後を測り、断面形は船底状である。溝が巡る方形壇の内法は一辺8.0mある。溝の埋土からは、瓦器楕・皿の完形品、土師器羽釜、須恵器甕片などが多量に出土した。

#### S D03

調査区中央部で検出したL字形に巡る溝である。幅70cm前後、深さ15cm～20cm前後を測り、断面形は船底状である。溝の南側は工場基礎の攪乱によって壊滅している。溝の東

側は調査区外となる。溝の埋土からは、土師器・須恵器・瓦器が出土している。

- S K01 S D02の埋没後に掘られた楕円形の土坑である。長径 1.2m、短径 1.0m、深さ 8cm を計測する。埋土からは土師器・須恵器片が出土している。
- S K02 S D02の埋没後に掘られた楕円形の土坑である。S D02の北東隅の西よりに位置する。長径 2.5m、短径 1.5m、深さ 30cm 前後を計測する。断面形は舟底状である。埋土内からは多量の須恵器・瓦器・土師器片が出土した。
- S K03 S D03掘削前に掘られた台形の土坑である。長辺 1.0m、深さ 40cm 前後を計測する断面形は舟底状である。埋土内からは、土師器片が出土している。
- S X01 S D02埋土除去後の底部で確認した落ち込みである。平面形は半月状で長径 1.0m 短径 80cm、深さ 24cm 程度を計測する。S D02との前後関係は不明で溝内の落ち込みである可能性がある。落ち込み内からは、多量の瓦器・土師器皿等が出土した。

3. まとめ 今回の調査では、近・現代の埋め立て地に近接する立地にも関わらず、中世後期の集落址を検出した。

検出した掘立柱建物と溝とはほぼ同一方位を探り、集落内に一定の区画割が存在していることを窺わせる。その集落の営まれた時期は、精細な出土遺物の検討が必要であるが、13世紀後半を中心とした時期が考えられ、出土遺物の検出状況から比較的短時期に経営された集落と考えられる。



fig. 152 調査区全景



fig. 153 SB01

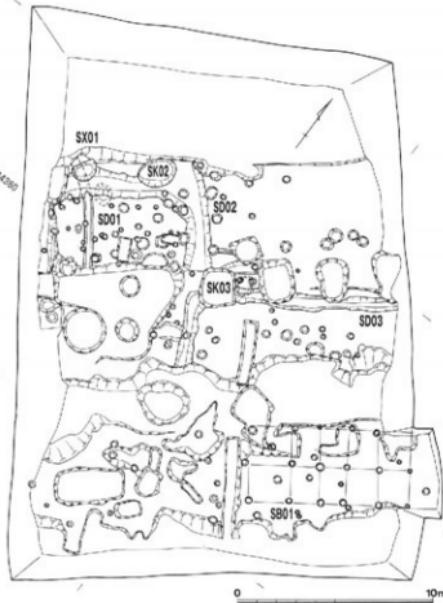


fig. 154 調査区平面図

## なかやまて 23. 中山手遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

当遺跡は、中山手通四丁目に位置する遺跡で、中世の集落跡として周知されている。この付近は諏訪山麓にあり、市街地化している。詳しい遺跡の性格については調査例がなく、規模・性格については不明である。現在、周囲には中宮古墳が点在しているが、中世を遡る集落跡は周知されていない。

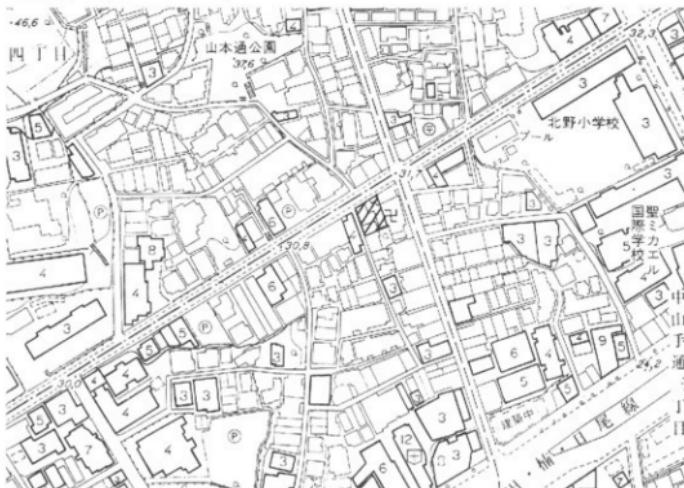


fig. 155  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

事前確認調査の結果を基にして調査を行い、掘削影響深度を考慮して約210cm程掘り下げ、最終的に弥生時代末の遺構面を検出した。

#### 基本層序

調査区の基本層序は以下のとおりである。

表層は震災前に存在していた建物用造成盛土と震災後の整地層であった。これらの盛土を除去すると調査区の南過半では、盛土以前の敷地境界をなしていた石垣を確認した。

以下、各地区（A地区：建物建設予定地、B地区：建物建設予定のうち石垣境より南、C地区：駐車場建設予定地）共にⅠ層は灰オリーブ色細粒砂5Y4/2（耕作土）、Ⅱ層はオリーブ褐色細粒砂2.5Y4/3（粗粒砂混）、Ⅲ層は暗灰黄色中粒砂2.5Y4/2（粗粒砂混・鉄分含）、Ⅳa層は黒褐色細粒砂2.5Y3/1（粗粒砂混・マンガン混・炭混・遺物含）、Ⅳb層は暗オリーブ褐色中粒砂2.5Y3/3（粗粒砂混・遺物含）、V a層は暗灰黄色粗粒砂2.5Y4/2、V b層は黄褐色シルト2.5Y5/3、V c層は灰オリーブ色細粒砂5Y4/2、V d層はオリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3（酸化）、VI層は灰オリーブ色細粒砂5Y4/2であった。

このうちIV層は古墳時代前期の遺物包含層と考えられる。また、V層は弥生時代末の遺構面（地山）である。

**落込流路** 落込流路は盛土の下の面でⅡ層を肩にして、調査区を斜めに横切るようにA地区の北半とC地区全域で検出した。埋土は①褐色粗粒砂 7.5Y R4/6 (酸化)、②暗灰黄色粗粒 2.5 Y4/2、③オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/3、④褐色極粗粒砂 7.5Y R4/6 (酸化)、⑤オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/3 (③より細かい)、⑥黄灰色粗流砂 2.5Y4/1.5、⑦オリーブ褐色粗流砂 2.5Y4/3 (中粒多い)、⑧黄灰色粗流砂 2.5Y4/1.5 (⑥に極粗粒砂含)、⑨オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/3、⑩暗灰黄色粗粒砂 2.5Y4/2、⑪オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/3、⑫褐色極粗粒砂 7.5Y R4/6 (酸化)、⑬オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/3、⑭オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/2、⑮灰オリーブ色中粒 5 Y4/2、⑯暗褐色極粗粒砂 7.5Y R3/4 (酸化)、⑰オリーブ褐色粗粒砂 2.5Y4/2 (⑯より粗い)、⑱暗灰黄色細粒砂 2.5Y5/2 (中粗砂混)、⑲黒褐色極粗粒砂 2.5Y3/2 であり、調査区の北東から南西に向かって流れ込むように厚くレンズ状堆積を呈していた。これら堆積は遺物等混入物の全くない山砂であるところから、洪水(昭和13年?)による堆積が考えられる。

**落込下層** 落込流路の下からは、ア：暗オリーブ褐色中粒砂 10Y4/1 (中粒砂・炭混)、イ：灰色シルト 7.5Y4/3 (にぶい黄褐色土粒混 10Y R4/3)、ウ：灰色シルト 7.5Y4/3 (酸化根跡含)、エ：灰オリーブ色細粒砂 7.5Y4/2 (中粒砂混・粗粒砂ブロック)、オ：暗オリーブ灰色細粒砂 5 G Y4/1 (中粒砂混)、カ：暗灰黄色シルト 2.5Y4/2、キ：暗緑灰色細粒砂 5 Y3/1 (中粒砂混)、ク：灰色細粒砂 5 Y4/1 (中粒砂混)、ケ：灰オリーブ色中粒砂 7.5 Y5/2 (粗粒砂混・酸化根跡含)、コ：灰色シルト 7.5Y4/1 (中粒砂ブロック・炭混) 等の層が確認できた。これら堆積は近世の耕作土の可能性がある。

**炭・焼土層1・2** A地区・C地区の北西隅では、落込流路埋土下で多量の炭と陶磁器を包含しているマウンド状の高まりを検出した。これらは出土遺物にみられる「諏訪山常磐櫓(軒)」の文字と遺物の年代から、江戸末～明治にかけて存在していた料亭もしくは茶屋の火災にともなう火事場整理と投棄であると考えられる。

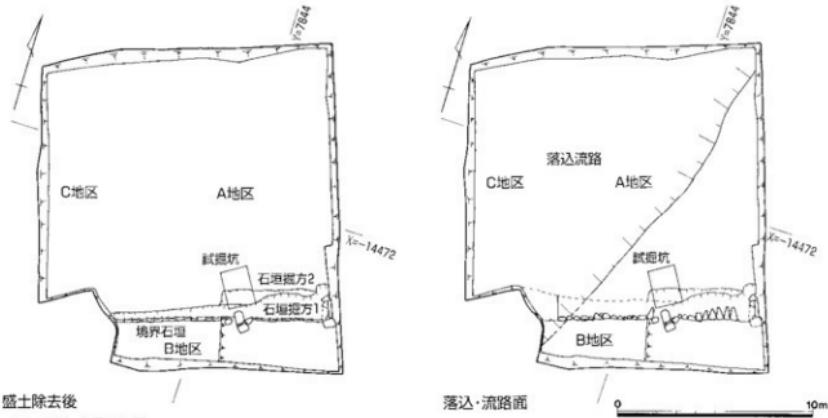


fig. 156 上層平面図

**第1遺構面** 第1遺構面はA地区の落込下層上面・II層上面・III層上面で検出できた遺構である。

**擾乱1~12** いずれも、上部の流路埋土と同じ土で埋まっている点、ベースとしている落込下層面から明治に入る遺物が出土していることから、これらは明治～昭和初期の擾乱と考えられる。

**S E 1** 調査区の北東隅に位置する井戸である。検出面から1m50cm掘削したが、伏流水のため掘削不能となった。埋土は上部の流路埋土で一気に埋まっている。遺物は発見していない。擾乱と同じ時期のものと考えられる。

**S D 1** S E 1の伏流水を排水する溝である。埋土は①暗オリーブ褐色粗粒砂5Y4/4(酸化)、②黒褐色細粒砂2.5Y3/1(粗粒砂混)で、上部の流路埋土により埋まっているので、井戸も含めて擾乱と同じ時期のものと考えられる。

**S D 2** S D 1はA地区の南を東から西に向かって斜めに流れ、一段下がったB地区の南西端に向かって流れる流路である。埋土は①黄褐色極粗粒砂2.5Y5/2(炭混)、②灰オリーブ色細粒砂5Y5/2(炭混)、③灰オリーブ色細粒砂5Y5/3(炭混)、④オリーブ褐色細粒砂2.5Y4/3(炭混)、⑤オリーブ褐色中粒砂2.5Y4/4、⑥暗オリーブ褐色中粒砂2.5Y3/3、⑦灰オリーブ色中粒砂7.5Y6/2(遺物含)、⑧灰オリーブ色細粒砂5Y4/2(炭混)、⑨暗オリーブ褐色細粒砂2.5Y4/4、⑩灰オリーブ色中粒砂7.5Y6/2(遺物含)、⑪オリーブ褐色細粒砂2.5Y4/4、⑫暗褐色極粗粒砂10YR3/3(酸化・遺物含・灰オリーブ極細粒砂5Y5/2ブロック)であった。特に⑦、⑩層から遺物が大量に出土している。

**S K 1** A地区的南東隅位置する土坑である。土坑は一辺90cmを計る木組みの横の様な物が納められていた。中には上層に炭層が充填されており、下層には灰色土がみられた。遺物は発見していないが、層位的関係から明治～昭和初期のものと考えられる。



fig. 157 第1遺構面平面図



fig. 158 第1遺構面全景



fig. 159 SK1

- 第2遺構面** 第2遺構面はA地区東半にある高まりにかぶっていた、II層・III層を掘削した面と石垣掘形の下層で検出した灰色層+褐色砂層を掘削した面、B地区SD2の下層に広がっていた灰色層+褐色砂層を掘削した面で検出した遺構である。
- 2SP6** 木桶がはめられていた坑で、3枚板でつながれた蓋の下には暗黒灰色砂土が深く続いている。状況からみて小規模な水くみ戸の可能性がある。
- 2SP7** 2SP7には中央に一本の木痕が認められた。2SP7・9には三本の木痕が認められた。いずれも埋土は暗灰色土であった。遺物は出土していない。
- 2SD3** 2SD3はSD2の下層に位置する溝で、方向もほぼ一致している。埋土は①暗灰黄色細粒砂 2.5Y4/4（中粒砂混）、②にぼい黄褐色粗粒砂 10YR4/3（酸化）、③暗灰黄色中粒砂 2.5Y3.5/2、④黒褐色極粗粒砂 2.5Y3/2、⑤灰オーリーブ色細粒砂 5Y4/2、⑥黄褐色粗粒砂 2.5Y5/4（暗オーリーブ褐色中粒砂 2.5Y3/3混）であり、埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。
- 2SK1** 2SK1は境界石垣の下からB地区にかけて広がる大きな土坑である。埋土は褐灰色土であった。埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。
- 2SP3** 2SP3は2SK1の東方に位置するピットである。埋土は灰色土で、埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。
- 2SP1** 2SP1・4・5はB地区のV層上面で検出したピットである。埋土は2SP1が褐灰色土、2SP4・5が暗灰色土であった。出土遺物から2SD3や2SK1と同時期の遺構であると考えられる。

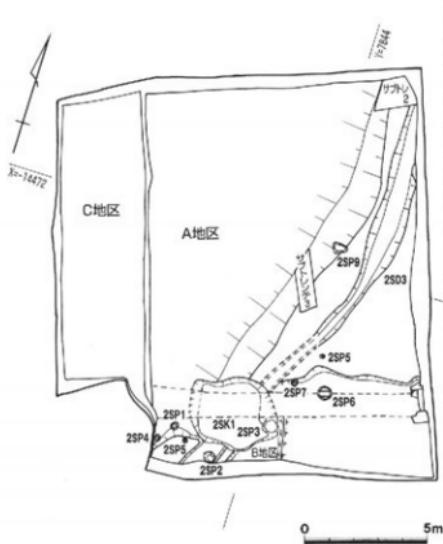


fig. 160 第2遺構面平面図

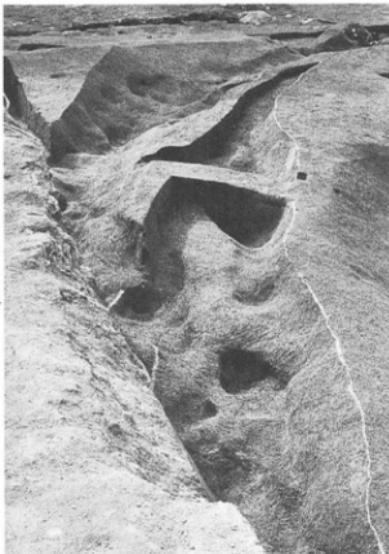


fig. 161 2SD03

- 第3遺構面** 第3遺構面はA地区東半にある高まりにかぶっていたIV層を掘削したV層上面で検出した遺構である。
- 3 SD 1 3 SD 1・2・3は溝状になる一連の遺構と考えられるものである。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。高坏の破片、韓式土器腹片が出土している。
- 3 SD 4 3 SD 4は円弧を描く溝状の遺構である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。遺物は出土していない。
- 3 SK 1 3 SK 1は調査区の東北隅にかかる土坑である。埋土は黄褐色粗粒砂 2.5Y5/4であった。弥生時代末の土器片が出土している。
- 3 SK 2 3 SK 2は落込肩部にかかる不整形の土坑である。埋土は黄褐色粗粒砂 2.5Y5/4であった。遺物は出土していない。
- 3 SK 3 3 SK 3・4は擾乱によって破壊されていたが元は同じ土壤であったと考えられる。3 SK 5は削平された浅い土坑で一部は試掘坑で掘削している。埋土は全て暗茶褐色粗粒砂である。
- 3 SK 7・SP 4 いずれも3 SD 4に切られているが、埋土には差違が無く暗茶褐色粗粒砂であった。
- 3 SK 8 SK 10をSK 8が切る形になっている。いずれも浅い土坑であり、埋土は3 SK 8が暗茶褐色粗粒砂、3 SK 10が茶褐色土であった。
- 3 SK 6 いずれも地山の肩部にあり一部が削られている長い楕円形を呈する土坑である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。
- 3 SP 1 3 SP 1・2・3はいずれも柱穴であるが性格は不明である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。

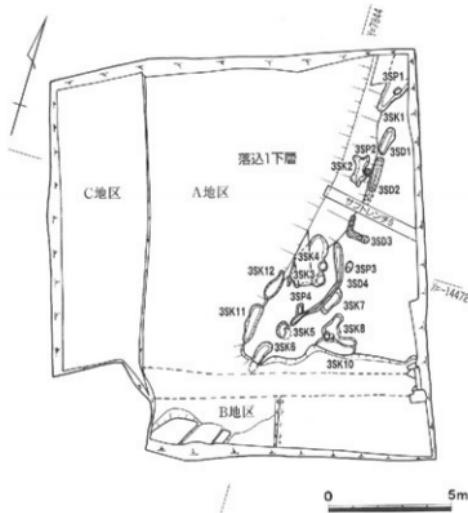


fig. 162 第3遺構面平面図



fig. 163 第3遺構面全景



fig. 164 第3遺構面全景

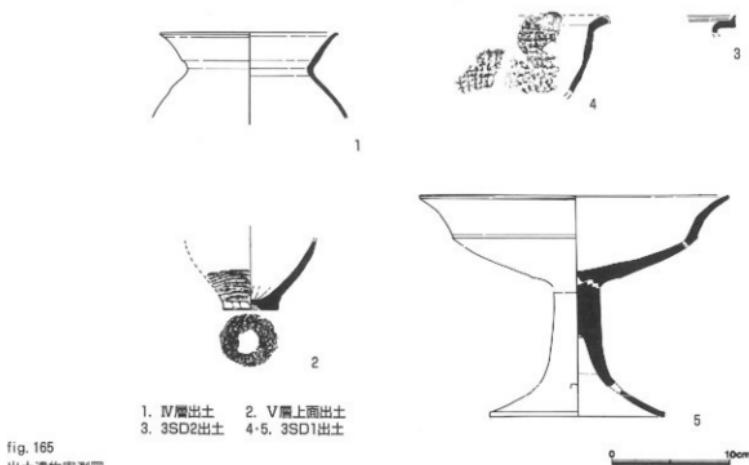


fig. 165  
出土遺物実測図

出土遺物 焼土・炭層1・2からは江戸時代末から明治にかけての古伊万里磁器、在地系土器を発見した。これらの遺物は同種類の磁器や古伊万里伝世品、特に「諏訪山常磐櫻」の銘から、料亭の台所廻りの火事による投棄と考えられる。

落込下層からは18世紀後半～19世紀の古伊万里磁器と在地系陶器、須恵器、古式土師器が出土した。

第1面遺構からはSD1、SD2から遺物が出土している。SD1からは18世紀～19世紀の陶磁器がSD2からは17世紀後半～19世紀の陶磁器が出土している。

第2遺構面からは2SD3、2SK1、2SP3から須恵器と土師器が出土している。

第3遺構面からは3SD1・2・3、3SK1から弥生時代末の土器が出土している。



fig. 166 炭層断面

## 3. まとめ 今回の調査では以下の点が明らかになった。

- ①洪水による大きな落込流路を検出した。
- ②「諏訪山常磐櫓」の火災の跡を発見した。
- ③流路の遺物から上流に古墳時代の遺跡の存在が想定できる。
- ④弥生時代末の集落跡を確認した。

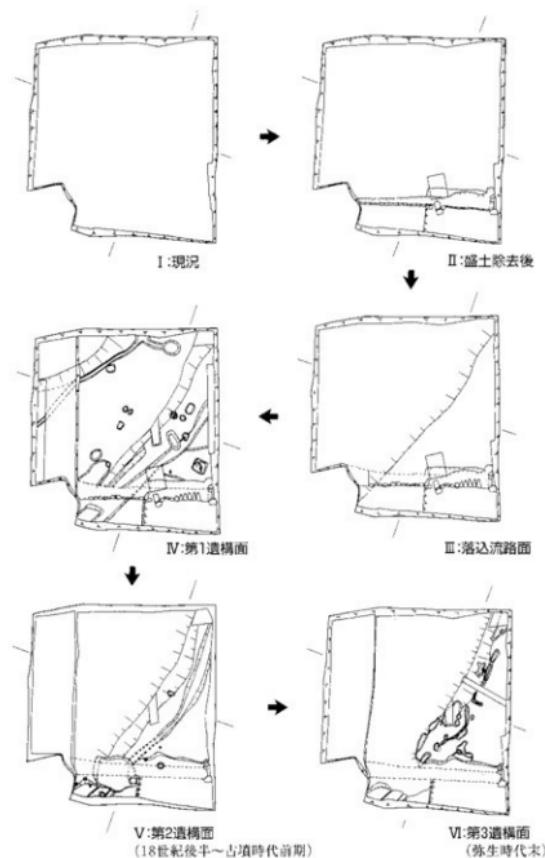


fig. 167 遺構面変遷図

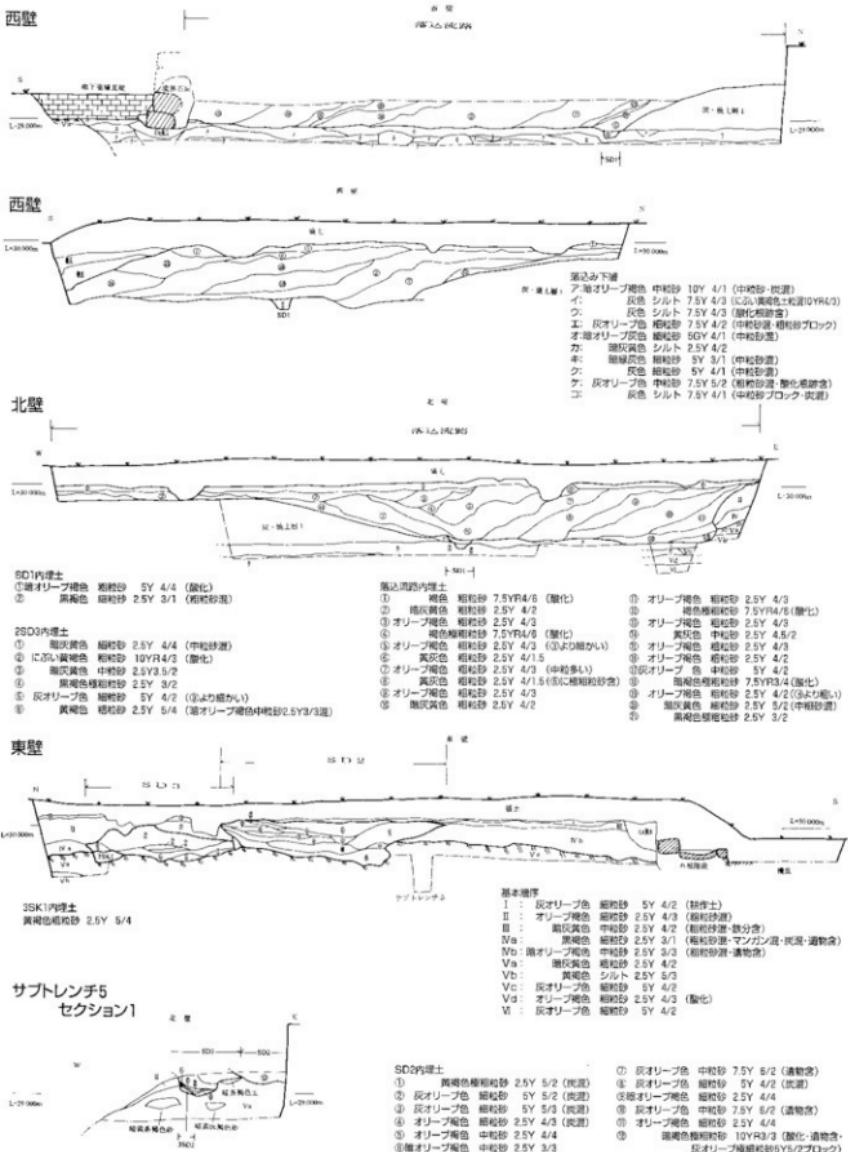


fig. 168 調査区断面図

## 1. はじめに

## 24. 雲井遺跡 第10次調査

雲井遺跡は神戸市の中心である三宮駅前の神戸市中央区雲井通・旭通に位置する。遺跡は六甲山系の南側の扇状地末端付近に営まれており、これまでに9回の発掘調査が行われて、繩紋時代早期から弥生時代中期にかけての遺構、遺物が見つかっている。

今回の第10次調査は、旭通団地建設事業に伴い、遺跡に影響の及ぶ部分について調査を実施した。



fig. 169  
調査地位位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

盛土(50cm)下約10cmで弥生時代の遺物を含む遺物包含層(10cm)があり、その下の黒褐色シルト混中砂上面で古墳時代の遺構を検出した。遺構としては溝15条・ピット多数・掘立柱建物1棟・竪穴式住居1棟を検出した。

## 掘立柱建物

調査区南西端で検出された建物である。柱頭形は、1辺85~105cm、深さ52~83cmを測る。柱間は、130cm程度と狭いもので、南北4間である。北側の東西は3間であるが、南では、2間しかなく、妻の部分の間数が一致しない。

時代は、出土遺物から、古墳時代後期のTK43~TK209にかけての時期に当たるとみられる。

## 竪穴式住居

調査区中央の南で検出された住居址である。1辺6mを測るが、北側の部分が擾乱によって破壊されている。コーナー部分からやや内に対角線上に当たる部分に、竪穴を

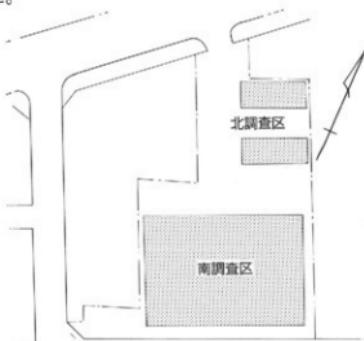


fig. 170 調査区設定図

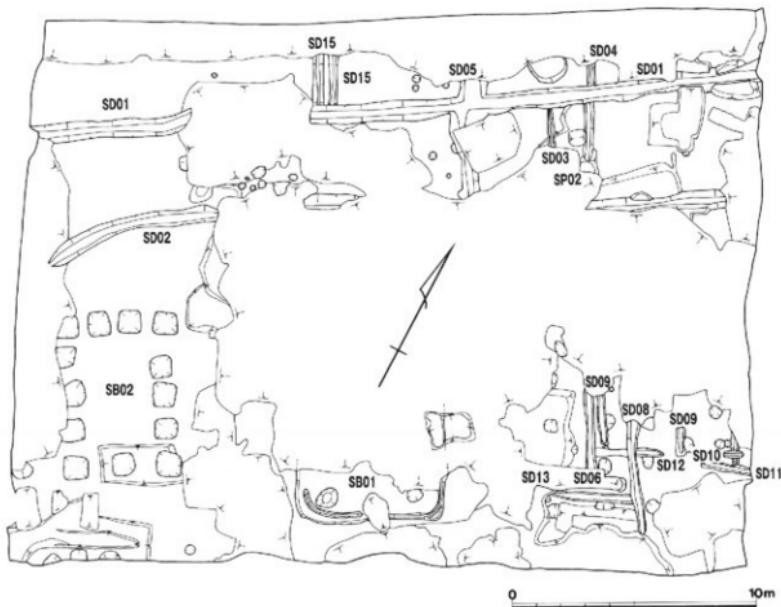


fig. 171 南調査区平面図



fig. 172 北調査区全景

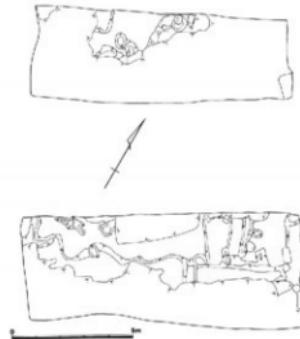


fig. 173 北調査区平面図

それぞれに確認している。また、幅20cm、深さ5cm程度の周壁溝をもつ。

床の上面は、焼土と炭におおわれていた。内部から出土した遺物は、床面直上のものは見られなかったが、一部に二次焼成をうけたと思われるものも見受けられた。なお、時期としては、古墳時代後期のTK10～MT85にかけての時期に当たる。



fig. 174 調査区全景

S D02 調査区北側に位置し、東北東から西南西にはしる、幅70cm、深さ20cmの溝である。

S D01とはば平行にはしるもので、その間隔は、4mから4.5mである。時期としては、いずれの溝からも、TK43～TK209に併行する遺物が出土している。しかし、いずれも埋土上層からの出土であり、作られた時期については、若干逆上の可能性をもつ。

S D03 調査区北側に位置し、東北東から西南西にはしる、幅40cm、深さ10cmの溝である。

S D05 調査区北側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅66cm、深さ28cmの溝である。

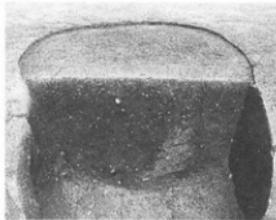


fig. 175 S P06断面



fig. 177 捩立柱建物

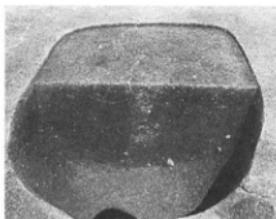


fig. 176 S P07断面

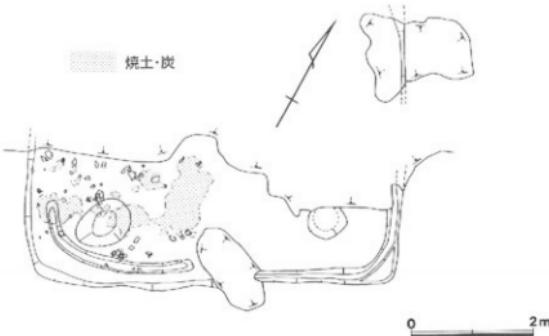


fig. 178 S B01平面図

- S D06~10 調査区東側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅40cm前後、深さ4~10cmの溝である。
- S D14・15 調査区北側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅70cm、深さ20cmの溝である。
- ピット 深さ30cm前後、直径30~50cm前後のピットを80箇所確認した。いずれも建物になるようなものはみられなかった。
3. まとめ 今回の調査では、中央部に大きな攪乱があり、わずかに残された部分の調査となった。そのなかで、僅かに残った部分から大形の柱掘形をもつ掘立柱建物が検出されたことは、ひとつの成果と言えよう。

これまででも大形の柱掘形をもつ掘立柱建物は、幾つか検出されているが、いずれも平安時代のものである。今回みつかったような1辺1m前後の柱掘形をもつ建物で、古墳時代後期のものは、神戸市では、極僅かに確認されているだけである。

この建物の性格については、6世紀末前後に各地で出現する官衙的な性格のものと比較する必要が認められるが、1棟のみで、建物配置が不明な現在では、保留せざるをえない。しかし、この周辺に、掘立柱建物を中心とした集落が存在する可能性は十分にあると言えよう。

また、雲井遺跡は、弥生時代と縄文時代を中心とする遺跡であるが、今回の調査では、包含層から弥生土器が僅かに検出されたのみで、遺構はまったく確認されておらず、縄文土器もまったく検出されなかった。

また、調査区内の断ち割りを行ったが地表下5mにおいても遺物は出土せず、東から西へ急激に落ち込む堆積が確認されたにすぎなかった。なお、隣接する第9次調査地においては弥生時代の遺構の他、縄文土器も確認されている。

これらのことから、雲井遺跡は、西から東へと高くなる地形のなかで、特に今回の調査地付近が急激に高くなる地点にあたるものとみられる。

このため、今回の調査地では、古墳時代後期には、すでに、縄文時代・弥生時代の堆積層は、削平されていたものと考えられる。

## 25. ひぐれ 遺跡 第15次調査

### 1. はじめに

調査地は、生田川と西郷川によって形成された複合扇状地上に位置する。調査地の現況地表面の標高は約14mで、北から南に下がる緩傾斜地である。

日暮遺跡の調査は昭和61年の第1次調査から当調査で第15次を数え、弥生時代から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡である。



fig. 179  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査の手順として建物の基礎となる杭部分の調査約100m<sup>2</sup>を先ず行い、基礎杭打設完了後残りの部分の調査を行うことになった。

#### 基本層序

調査区にはかつて店舗の他に倉庫があり、倉庫の基礎により状況の悪い箇所では、8層まで擾乱を受けているところもある。現代盛土層（1層）の下層に旧耕土・床土（2・3層）が存在する。

4層を削除すると6層上面に牛と考えられる足跡が散見された。（第1遺構面）第1遺構面は標高13.6m前後である。6・7層を削除すると第2遺構面（8層上面）となる。8層を削除すると第3遺構面（9層上面）となる。8層からの出土遺物は、極端に少なくなる。9層以下の層は噪を含み無遺物となる。

4・6・7・8層中からは、土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・陶器・土鍋等が出土した。

#### 第1遺構面

第1遺構面では、井戸状遺構1基・溝状遺構2条・不定形土坑（S X 101）が検出され、特に調査区南西部で牛の足跡が検出された。しかしながら足跡の方向性や水田の区画について不明である。

#### S E 101

S E 101は、直径1.3m・深さ1.1mの規模で、遺構の上部は旧建物の基礎によりなくなっていると思われる。



fig. 180 S E 101

遺構内より土師器皿・鍋、須恵器鉢、常滑焼と考えられる壺・甕が出土した。遺物より14世紀頃と考えられる。

**第2遺構面** 第2遺構面では、畝状遺構と畑を形成する段状遺構が検出された。ほかに調査区北西部でSX201が検出された。

**畝状遺構** 畝状遺構（SD201～228）は幅0.2～0.8m・深さ0.05～0.15mほどの規模で、畑の畝の谷部分が溝状に検出されたものである。方向は基本的に東西方向である。段状遺構が3カ所検出されたことから、畑が4面あったことが考えられる。

**SX201** SX201は、溝状遺構として図示しているが、最初に述べたように倉庫の基礎特にオンドル状のものによって炎熱を受け土壌そのものが変質し、遺構として掘削することに難渋した。幅約1.0m・深さ約0.2mの規模で、土師器皿・須恵器瓦等が出土した。

調査区東北部には第2遺構面と第3遺構面の間に遺構面が存在した。検出された遺構は、不定形土坑4基とピット15基（P201～21）である。土師器・須恵器片が少量出土した。ピットは建物等にはまとまらないようである。

**第3遺構面** 第3遺構面では、土坑6基・流路状遺構1条・ピット2カ所が検出された。

**SK301** SK301は、直径約2.0m・深さ約0.8mの円形の土坑に深さ約0.4mの台形状の突起部がとり付いたような形状の遺構である。土師器鍋・瓦質羽釜・須恵器鉢・陶器片・砥石3

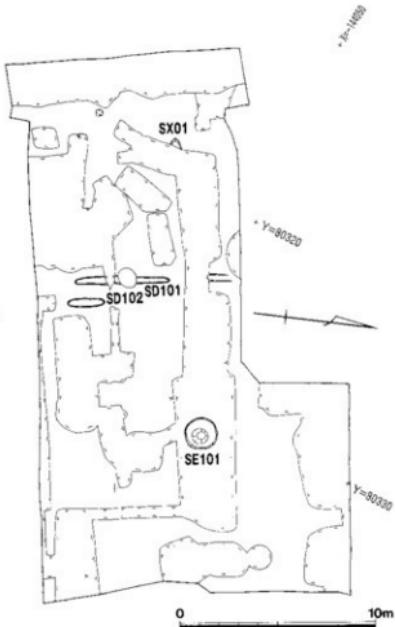


fig. 181 第1遺構面平面図

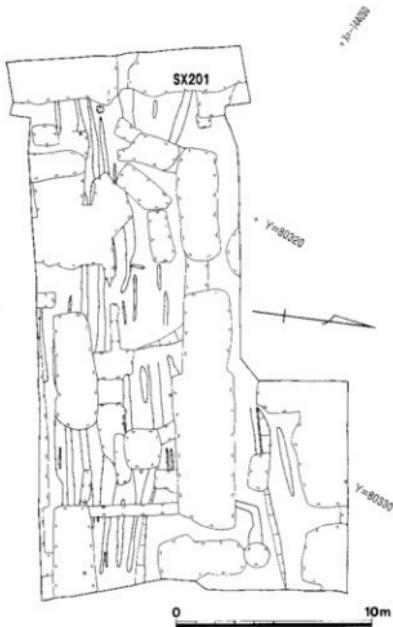


fig. 182 第2遺構面平面図

個等が出土した。

- S K302 S K302は、1辺約0.8m・深さ約0.5mの隅円方形の土坑である。少量の土師器・須恵器が出土した。
- S K303 S K303は、検出された部分での規模は1辺約1.0m・深さ約0.5mの方形の土坑である。少量の土師器が出土した。
- S K304 S K304は、擾乱等によって形状は不明である。深さ約0.4mの土坑で、遺構の上層部で土師器皿片がまとまって出土した。
- S D301 S D301は、調査区西部で検出された深さ約0.3m程の流路状遺構である。暗茶褐色砂泥が堆積しており、遺物は出土しなかった。
- 第3遺構面検出の過程で調査区東辺中央部で弥生時代後期後半頃と考えられる壺・瓶・鉢が中世の土師器・須恵器とともに、まとまって出土した。当調査地の中世の遺跡が形成される過程で付近から流れこんだものであろうか。

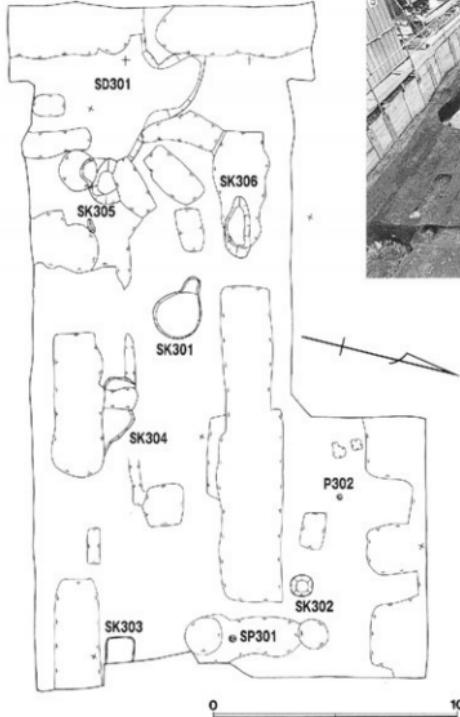


fig. 183 第3遺構面平面図



fig. 184 第3遺構面全景

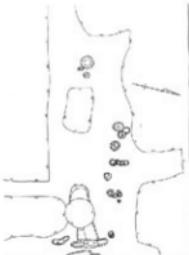
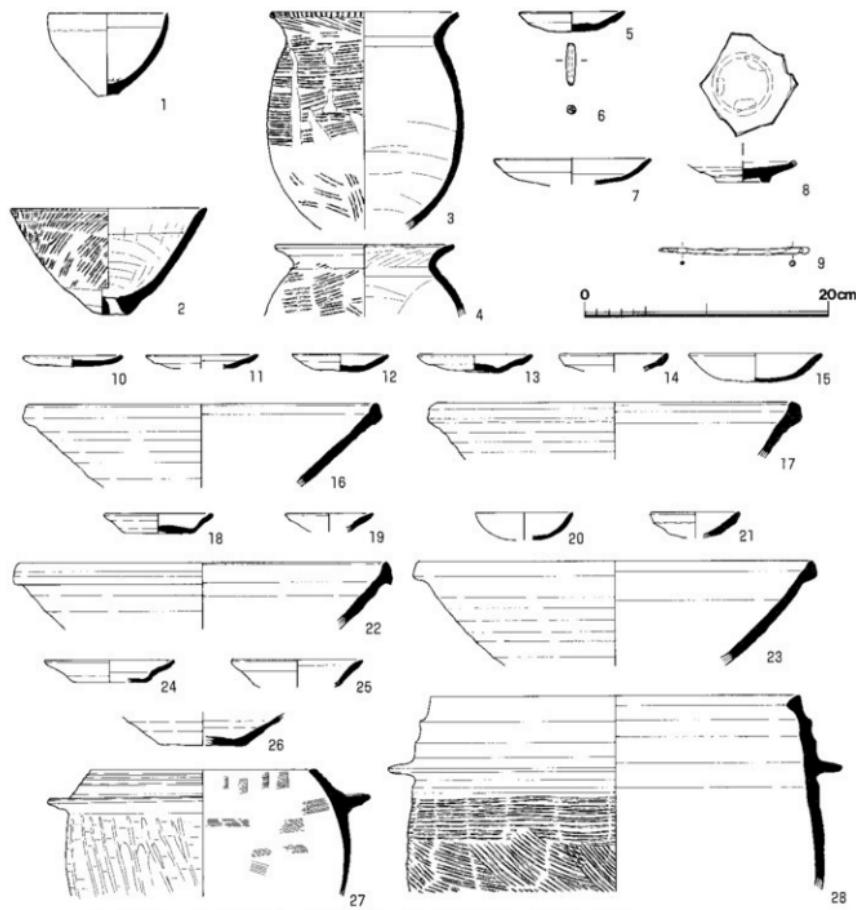


fig. 185 第2～3遺構面平面図

3. まとめ 今回の調査において遺構面は3面検出された。第1・2遺構面は、水田もしくは畠と考えられる遺構面である。第3遺構面も土坑等の遺構が検出されたが、遺構の検出密度としては低いものと思われる。これまでの十数次の調査内容から、当調査地は生活・居住空間ではなく、その縁辺に当たる生産空間のような箇所であろうと考えられる。

第1～第3遺構面までの時期は大差なく、遺物から12世紀後半から14世紀の間に納まるものであると考えられる。



1~4・7・8 包含層2, 5・6 包含層1, 9 包含層3, 10~17 SX201, 18~21 P301,  
22~31 SX301

fig. 186 出土遺物実測図

## 26. みなとがわ 湊川遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

湊川遺跡は、旧湊川等小河川によって形成された沖積地に存在しており、微高地には、宇治川南遺跡・六番町遺跡・神楽遺跡等の縄文時代から鎌倉時代にかけての遺跡が分布している。



### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設工事に伴うもので、工事の影響の及ぶ範囲を対象とし、当初、全面調査を前提としていたが、杭部分の調査段階で、全域にわたって河道の氾濫源となっていることが、判明したため、部分調査に切り換えた。

#### 基本層序

上層より現代盛土、旧耕土、中世包含層の順で、中世包含層の下層上面が第1遺構面となる。

#### 検出遺構

包含層を除去したあと、遺構検出を行ったが、遺構は部分的にしか確認できず、その大半は近世の河道によって削平されていた。僅かに残存していた遺構は以下の通りである。

#### S X01

調査区の北西隅にて検出した遺構で、深さ約30cmを測る。遺構の性格は不明である。

#### S X02

S X02は、最終埋土が近世の洪水砂であり、洪水の直前には湿地帯であった様子で、植物遺体や有機物の土壤化した土が、近世の陶磁器と共に堆積している。その下層には、中世の遺物のみを含む層が存在し、この層が落ち込みの最初の堆積と考えられる。近世埋土の上面には、おそらく奇跡目であろう足跡が一面に検出された。

#### 護岸石組み

護岸石組みは、中世の包含層を切って振り込まれている掘形に据えられており、全て花崗岩を使用している。石組みの南東側には、近世の洪水砂中ではあるが、人頭大の転石がみられ、石組みの裏込め石である可能性が考えられる。出土遺物等から、S X02の下層と同じく中世以降に位置づけられるものと思われる。残存する石組みは基底部である1段（もしくは2段）であり、15列が検出されているが、南西端は近世の洪水によって切られ

ており、更に続いている可能性がある。また、北東端もS X02の最終埋土である洪水砂に切られている状態であるので、北東側へも更に伸びる可能性があり、石組みの規模の詳細は不明である。よって、性格的なものも明確にはできない。

3. まとめ 周辺地域の調査によれば、断片的にではあるが、古墳時代から中世にかけての遺構が確認されている。当調査区内においても包含層からこの時期の遺物が出土しており、遺構の存在する可能性は否定しきれない状況にある。しかしながら、包含層は、僅かに確認されたのみで、遺構面は、近世の河道に切られ、存在していたであろう遺構は、その殆どが削平をうけている。

このような状況から当調査地の状況についての詳細は不明であるとせざるをえない。

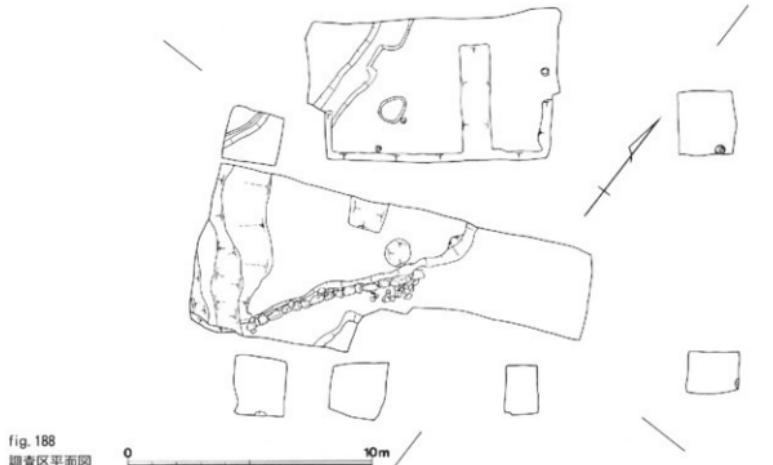


fig. 189  
石組み遺構

## 27. 上沢遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に神戸市教育委員会が行った第1次調査が最初である。その時の調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成7年の第2次調査では、弥生時代の水田面が見つかっている。さらに平成8年に隣接地で調査された第3次調査では、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭、奈良～平安時代、中世と各時代の遺構が発見され、複合大遺跡であることが判明している。

今回の調査は山手幹線拡幅に伴う調査で、拡幅される道路の歩道部分に当たる。今回の調査地は第3次調査範囲に東と西で接している。



### 2. 調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、茶褐色砂質シルト層の包含層となる。見つかった遺構面は中世・平安時代の第1遺構面、弥生時代後期・古墳時代・奈良時代の第2遺構面、弥生時代前期の第3遺構面であった。弥生時代前期の遺構面に関しては、調査区の西半部では第3遺構面として検出したが、東半部では第2遺構面と同一面で検出している。

#### 第1遺構面

第1遺構面で見つかった遺構は土坑7基、溝3条、井戸1基、ピット約100基である。遺構は調査区の西半部に比較的集中している。

S K01

S K01は長径1m、短径90cm、深さ14cmの梢円形の土坑で、拳大の礫が詰まっていた。出土遺物は少ないが、12世紀のものと思われる。

S K02

S K02は調査区外に延びるため、全体の規模は知り得ないが、円形の浅い土坑である。検出した最大径は2.9mで深さは10cmであった。12世紀のものと思われる。

S K07

S K07は直径65cm、深さ6cmの円形の土坑で、土師器の皿が数点出土した。12世紀のものと思われる。

SE01 S E01は直径1.7mの井戸で、深さは底部まで1.3mで、底部からさらに20cmの深さを持って曲物がはめ込まれている。壠形の上面は円形であるが、途中からは方形に穿たれていた。底部の平面形は一辺90cmの正方形である。底部に埋め込まれていた曲物は直径40cmであった。曲物を埋め込むための掘形は、曲物の大きさと同じである。曲物の残存している高さは20cmであった。

井戸内の埋土はシルト質極細砂を基本とするが、中位では井戸枠と思われる材が崩れたように埋没していた。出土した井戸枠は、元来構成されていた井戸枠の一部しかなく、殆どが原位置を留めていない。また、その井戸枠材に重なり、拳大から人頭大の礫が投げ込まれたような状況で出土している。井戸枠の材にはホゾ穴を穿ったものや杭状のものがある。曲物の中にはシルトが堆積し、拳大の礫が入れられていた。

出土遺物は須恵器・土師器・白磁・土鍾・砥石である。これらの遺物から判断して、この井戸は12世紀のものと思われる。



fig. 191 S E01

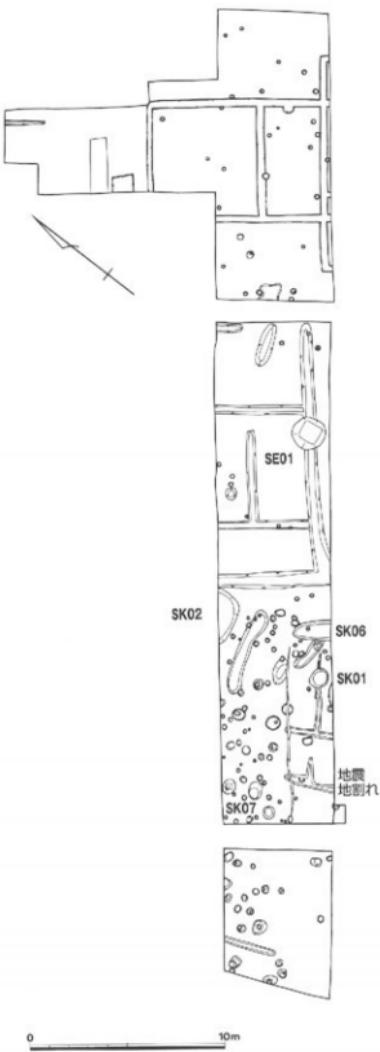


fig. 192 第1構造面平面図



fig. 193 SK01

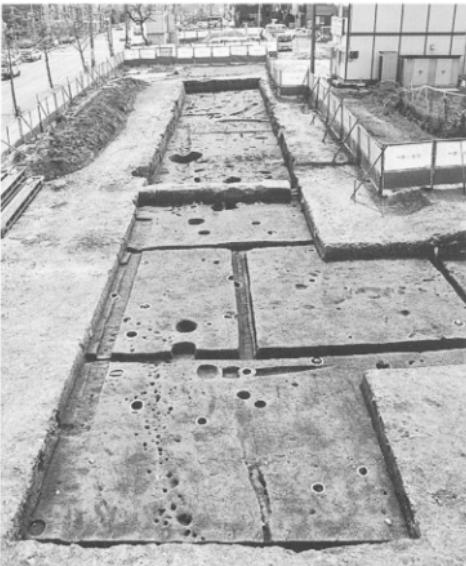


fig. 195 第1遺構面全景



fig. 194 SP04

**ピット** ピットは多く見つかっているが、柵列状に並ぶものはいくらかあるが、掘立柱建物を構成するものは分かっていない。ピットの時期は12世紀のものと、平安時代と思われるものがある。

**第2遺構面** 第2遺構面では掘立柱建物6棟、土坑18基、溝4条、ピット200基以上が見つかった。遺構は調査区全体に分布している。

**S B201** S B201は調査区の東端部で見つかった掘立柱建物である。建物の規模は東西3間（7m）南北2間（4.2m）で、柱間隔は2.2m～2.5mである。柱穴は直径70cm内外、深さは40cm内外のもので、平面形は円形か楕円形であった。柱穴の中には拳大の礫が詰め込まれているものもあった。側柱のみの掘立柱建物である。

**S B202** S B202は調査区の中央部で見つかった掘立柱建物である。建物の一部が調査区の南側に延びる。建物の規模は東西2間（4m）南北3間（4.5m）で、柱間隔は東西が2m、南北が1.5mである。柱穴は直径65cm～70cm、深さ30cm内外で平面形は円形である。この建物も側柱のみの掘立柱建物である。

**S B203** S B203は調査区の中央部で見つかったS B202に先行する掘立柱建物である。建物は調査区の北側に延びるため、全体の規模は不明である。東西は2間（4.6m）で南北は1間以上（4.3m以上）である。柱間隔は東西が2.3m、南北が2.1mである。柱穴は直径65cm～80cm、深さ30cm内外で平面形は円形である。側柱のみの掘立柱建物である。

**S B204** S B204は調査区の中央部で見つかった掘立柱建物である。建物は調査区の北側に延びるため全体の規模は不明である。東西は3間（4.8m）で南北は1間以上（2.9m以上）で